

Title	ゲデス 第1報告：都市学-応用社会学としての試み
Sub Title	i) Patrk Geddes, civics: as applied sociology
Author	五條堀, 陽子(Gojobori, Yoko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.29- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集都市・ 公共・ 身体の歴史社会学-都市社会学誕生100年記念- A編 ゲデス・ プロジェクト 第II部 ゲデスの都市(市政)社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第 II 部 ゲデスの都市(市政)社会学

ゲデス研究会訳

Patrick GEDDES, 1905, "Civics: As Applied Sociology,"
Sociological Papers 1904 (1905): 103-118.

1904年7月18日(月)午後5時からスクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンス(ロンドン大学)で開催された社会学会で報告された。

議長: チャールズ・ブース(Charles Booth)卿(王立協会会員)

ゲデス 第1報告

都市学——応用社会学としての試み

パトリック・ゲデス

はじめに

都市学は社会学的研究である以上、可能な限り具体的に論じなければならない。この分野で実践家や市政担当者に訴えかける研究を成したいなら、重要なことは、都市の体系的研究に見合った方法を見出すことである。その方法は実りある行動の基礎となるものであり、単なる研究の成果というだけではなく、ローカルな観察と実践的な営為の中で獲得される方法でなければならない。それゆえ私の課題は、好奇心旺盛な逍遙する観察者(moderately-travelled observer)の経験から自然に結晶化してくる普遍的/generalな考え方を描き出すことである。それによって都市の観察

は、細部にわたることもあれ印象派のようにパノラマ的なものであれ、徐々に発展してゆき体系だった〈地域調査 (Regional Survey)〉になるはずである。次にこのような視点を、それに対応する実践的な経験——^{シティズンシップ}市民としての様々な経験を通して獲得されるもの——と互に関係づけなければならない。それゆえ、こうした考え方を^{シビック}市政行動のより広範で体系だった把握へと発展させるべきである。それが〈地域事業 (Regional Service)〉になる。ひとことで言えば、〈応用社会学 (Applied Sociology)〉一般、またはその主要な一分野としての〈都市学 (Civics)〉は、〈社会調査 (Social Survey)〉の〈社会事業 (Social Service)〉への応用として定義できるだろう。

〔▲〕この複合的な研究領域では、予備的な個々の領域と同じく、日常的な経験や常識的な解釈が徐々に体系的な特徴、すなわち、科学的な性格を帯び始める。その一方、われわれの活動がより体系だった包括的なものになるとときには、技芸 (art) にも接近している。したがって、社会学的研究一般を都市という具体的領域に応用するために、一方で観察および記録を行う科学のための^{センター}施設、他方で実験的な営為に対応する施設が、構想されている。つまり、社会学的観測所と社会学的実験室という構想である。それも、両者がより調和しつつあるようなかたちで構想されている。そのような観察や実験の協働形態 (association) や、その先駆けとなるような施設は既にあるのだ。科学と技芸の相互関係を表すには、化学と農業の関係あるいは生物学と医学の関係での事例で十分であろう。人口統計と衛生管理や、商業統計と政治のような明白な関係が認識され始めているにもかかわらず、厳密に社会学的な水準や^{シビック}市政への応用の場面では、今までのところ一般的には〔科学と技芸のような関係が〕あまり知られていない。最近活動を開始したこの学会の発端となったかの論文において、科学的な人口統計学と実践的な優生学との間の深い関係は始まったばかりである。そこで、このような凝集としてのコミュニティ (community in the aggre-

gate) についての研究は、統合体としてのコミュニティ (community as an integrate) についての研究の中に、物質的あるいは非物質的な構造や機能を持つ、対称的で補完的なものを見出すことができる。つまり、われわれはそれを都市 (the City) と呼ぶものの中に見出すのである。それと関連してコミュニティおける個々の改良——優生学の目的——に対応して都市が進歩する。似通った命名法を使えば (少なくとも当座の間であるけれども)、社会学者は「人口統計学 (demography)」だけではなく「政治統計学 (politography)」に関心を持っており、「優生〔遺伝〕学 (eugenics)」は「政治遺伝学 (politogenics)」と切り離すことができないのだ。それというのも、人口統計学者によって主に個人の側面から観察されていることだが、生存競争は都市内^{シビック}だけではなく都市間^{シビック}のプロセスである。そうであるならば、改良的淘汰、つまりいまのところ優生学として個人に照準されたものは、対応する市政の技芸 (civic art) と切り離すことができないのである。市政の技芸、それはすなわち、文字どおりの「優生政治遺伝学 (Eupolitogenics)」である。

A. 都市についての地理学的調査

〈都市調査 (Civic Survey)〉を具体化するには、どこから始めることにしようか。ロンドンは都市^{シビック}的活動が多様で大規模なだけではなく、特にチャールズ・ブース (Charles Booth) 氏と共同研究者による社会調査があることでも、傑出した地位を有している。しかしたとえ最良の解釈をしても、世界の都市のなかでもっとも巨大なこの都市は、ぼんやりした迷宮のままである。その迷宮から見たとしたら、小さな都市が集まる周辺地域を「ロンドン以外の地域 (the provinces)」と安易に一般化することをどれほど避けようとしても、その周辺地域はぼんやりとしか記述できないのだ。われわれの〔目指す〕総合的 (general) な比較研究にとっては、もっとシンプルな始め方がよい。それゆえ、基本的なテーゼ——人々の分類につい

ての研究は人種や語法なり言語なりの研究に劣らず明確である——に適しているのは、ある一定の地理的地域——休日や山岳地で過ごすときに目の前に広がっているような景色——をより明瞭に見通し、よりパノラマ的に見てゆくことである。われわれは狩猟のための広大な荒野がのどかな山腹に広がっているのを見下ろしながら、耕作地と点在する山里が繰り返し現れる場所へと下ってゆき、峡谷の中心となる小さな高台にある村へとわれわれは誘われる。このような景色が繰り返されてから、大きな賑わいのある山麓の村、そして鉄道の駅へとさらに下ってゆくのである。ここで高原と低地が出会う。山岳の谷間には東部でも西部でも、似たように端緒となる村と終端となる村がある。その村々は肥沃な扇型の斜面の上にあり、そして相応の規模の市場がある。一方で、曲がりくねったゆっくりと流れる川とともに農業が行われている大溪谷には市場で賑わう町があり、峡谷にある方々の村から道路と鉄道が集まってくる交差点もある。さらにもう一日分進めば、いくつもの谷が合流するところに州の主要都市 (county town) がある。私がこのように記した地域は、スコットランドの中心に近い地域であるというだけではなく、もうひとつ重要な条件がある。最近になっても船舶が航行できるような河川であるという制限である。最終的に河口に至ると、大きな工業都市の煙が立ち昇り、中心的な世界市場がある。このような河川システムは、多くの地理学者が指摘しているように、都市や文明の研究家にとって必要不可欠な構成単位である。それゆえに、このシンプルな地理学的方法は、対象を体系だって比較する際の表現方法の基本として検討されねばならない。われわれは源流から海へと下ることによって、そのシンプルな起源から複雑な生成物にいたる文明の発展を辿ることとなった。そして、この〔発展の〕どの要素も省くことはできない。われわれが仮に最初の構成単位として貧しい山間の農村から始め、放牧のための後背地や森林、狩猟場のことを忘れてしまったとしても（都市についての著述家が犯しがちな誤りである）、人類学者がハンターのこと

を忘れていることを思い起こさせてくれるだろう。〔この誤りは〕貴族主義的な支配のなかにある軍国主義的な活動の本質的な病原菌 (germ) の部分を省いてしまう。同様に、田園生活を見捨ててしまうことで、霊的な力の主要な源泉を見失ってしまう。そこには、歴史的な宗教だけではなく、詩的なものから教育的なものに至る後の文化の要素をも含まれる。そうだとすれば、都市を形成するには、地域のすべてを必要とするのである。われわれが下ってきたように、積荷が河川の上流から下流へと運ばれるのと同じく、複合的なコミュニティはそれぞれ、より上流にあるものによって規定されてゆくのだ。逆〔により下流にあるものが規定する〕ということもまた言えなくもないが比較にならない。

このようにわれわれは地理学者のお陰で、都市の分類についての知識を迅速に反省し拡張しうる。われわれ〔イギリス〕のものではディー川からテムズ川に至る一連の流域についての調査が、そして大陸の主要な流域、つまりライン川とムーズ川、セーヌ河とロワール川、ローヌ川、ポー川、ドナウ川の流域についての調査が、またアメリカにおいても同様にハドソン川とミシシッピ川についての調査が、都市研究への導入として確実なものであると認められるだろう。同じようなタイプの比較により、発展、構造および機能についての統一的 (general) な見解が得られるのだ。例えば、メッシニコフ (Metschnikoff) に従うと、河川の (potamic) 文明、内海の (thalassic) 文明、海洋的 (oceanic) 文明が見出される。ルクリュ (Reclus) に従えば、小さな町や大きな町の間での定期的な交易は、地理上の位置だけではなく旅程の距離によっても大きく影響を受けていることを知る。歴史的な多様性にもかかわらず、防衛や政府の要請、宗教の発展は、基本的には同じなのである。もちろん行政、商業そしてコミュニケーションが集中化して、山間の農村から海沿いの大都市に至る階層化という基礎地理学的シンプルさをいかに変化させ、もしくは偽装してきたのかということは念頭に置かなくともよい。しかし、もっとも大きな都市に対し

でも、^{ナチュラリスト}自然観察者のような初歩的な視点に絶えず立ち戻ることが研究者にとって有益なことなのである。往々にしてわれわれはロンドンが、中世の港の周囲にでき、共有地のつぎはぎが残るような、基本的には村落の集合であると知る。もしくはパリの最も華やかなる部分、広い並木道の広がるエトワール広場〔星型広場〕と呼ばれるところでさえ、放射状に真っ直ぐ伸びた森林の中の馬車道にある、倒木のそばのハンターの落ち合い場所であったとわかる。アメリカ都市の道路網が狭く直角で、斜めの近道が羨望の的となっているのは、よい土地を道路に割くことを渋る田舎者の節約という軽率な頑迷さによって説明できる。要するに、われわれはもっともよく研究された都市計画と思われるものにおいても依然として、ミツバチ〔の行動〕がそうであるように遺伝的に受け継いだ本能から組み立てているのである。われわれ〔が目指すところ〕の都市学は、まだ応用社会学には到達していない。

B. 都市についての歴史学的調査

都市は単に空間における^{プレイス}地点ではなく、時の流れにおけるドラマである。確かに地理学の主張は重要なものであるが、都市の歴史についての関心はさらに重要である。ユダヤ地方のある丘の城砦や、〔ギリシャ南部の〕アッティカの城砦が、今日に至るまで近代の首都よりも大きな影響力を持った重要な世界の中心へと発展したことは、単に地理的な要因によらないことは明らかである。このように豊富な歴史的関心や資料は、専門分野の多様化と対応して、これまで以上に〔資料を〕グループ分けして分類するための方法が必要であることを証明している。われわれに必要なのは地理学という考え方においてと同様に、歴史という考え方もパノラマ的に単純化すること、そして可能ならば両者を協調させることである。つまり地質学者とともに岩石層の研究をするにせよ、考古学者とともに最近の堆積物からの発掘をするにせよ、あるいはまた歴史学者とともに旧跡や記念碑

の解釈をするにせよ、地理学を通して答えが得られるのである。それはもはや単なる地図や土地の起伏ではなく、過去から現在に至る状態という縦の位相についての地理学なのである。先ほど自然地理学者のように描き出した基本的な条件が、明白にそしてたいい恒久的に残っているにもかかわらず、都市には歴史的発展に特有の段階が解読可能な形で積み重ねられている。だから父権的文明の下においてでさえ、初期の母権的秩序がしばしば露わになる。われわれの品位のある近代都市やルネサンス期の都市の実地調査への関心は、絵画のような中世の面影を見出すことで多彩なものとなる。その下の層にはローマ時代の残骸が散りばめられている。さらにその下の層には、未開人の砦や遺跡もあることだろう。だから、旅行の魅力がわれわれを改めて調査へと向かわせる。先ほどと同じように流域からスタートすれば、地理的なパノラマは、いまや新たなそして深い関心を喚起する。例えば、長く忘れられていた原始時代の中心地が息を吹き返す。先史時代の古墳は死の眠りから覚まされる。ストーンサークルへと参拝者は戻ってくる。イギリスやローマの野営地には戦士たちが再び集まり、ありふれた市場が開かれる街のかたわらに、アーサー王時代〔6世紀頃〕の首都(Capital)がぼんやりと立ち現れる。それに続く数百年の後に、王位篡奪者の塔が建ち、そして崩れる。中世の大修道院や巨大な城砦がわが世の春を迎える。都市は宗教改革やルネサンスとともに、再び姿を変える。そして、産業革命によって徹底的な変化が生み出される。都市は工場、鉄道、蒸気船などによって大きく変貌したのである。例えば、鉄道や電信の影響による都市内の変化や集中化よりも重要だと言えそうなのは、淘汰である。古い秩序で生まれた数え切れないほどの港町は、近代船舶の深い喫水に対応するかどうかで淘汰され、ほんのわずかしかなかったのだ。ひとことで言えば、生命あふれる都市は、進化において過ぎ去ったすべての段階の痕跡を残すだけでなく、それぞれの段階の化石のようなものや遺物も残しているのである。

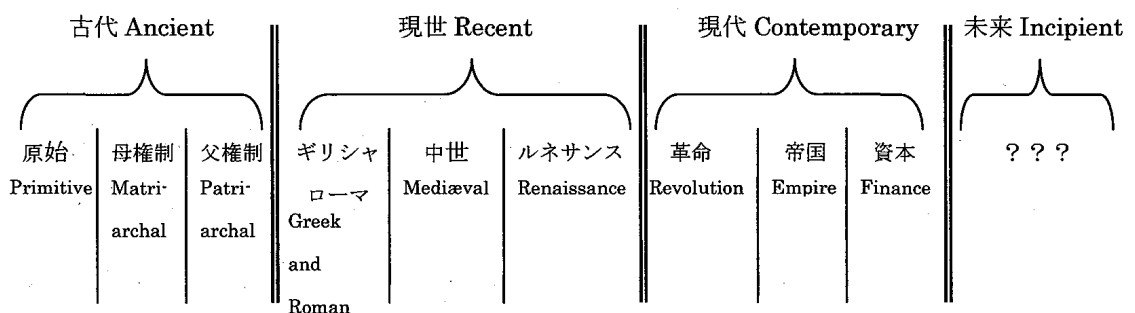
〔▲〕そこで、社会学教育における長年の実験と実践の結果、地理学的であり同時に歴史学的でもある地域調査以上によい方法がないとわかった。美しさやロマンティックな関心からメルローズ (Melrose) へ行くようなポピュラーな小旅行から始めると、われわれは旅行者の目で、〔イングランドとスコットランドとの〕境界地方の雰囲気や伝統が、ウォルター・スコット (Walter Scott) 卿の言い回しや世界にどれだけ影響を与えていたかを知る。カーコルディ (Kirkcaldy) やラルゴ (Largo) が代表的な街と言われ、長い間孤立していたファ이프地方 (Fife) の半島を他の地域と比較しながら進めば、アダム・スミス (Adam Smith) やアレクサンダー・セルカーク (Alexander Selkirk) (『ロビンソン・クルーソー』〔のモデル〕) がそのプロトタイプとなるような個人主義を生む条件がいまだに見られる。このように地域の地理学、歴史、そして社会心理学の関係が、ますます明瞭になるのだ。一方で他のファ이프地方にある古い港町を探索すると、現存するいくつかの町は〔オランダの〕ゾイデル海にあるものと似ていることがわかる。あるいはスコットランドの戦略的な拠点となったスターリング (Stirling) の重要性が理解されるだろう。また一方で、中世初期の首都であり修道院の街であるダンファームリン (Dunfermline) は、大エディンバラについての研究に備える上で格好の対象となる。エディンバラには、リースの港、王城、ホリールード宮という三つの中心があり、これらはそれぞれ、ロンドンの港、ロンドン塔、ウェストミンスター寺院と対応している。そしてそれぞれの都市群には、遅れて不完全ながらもひとつの都市へと合併される小さな自治都市 (burgh) が広がっている。また、都市の起源や発展における〔新興都市の〕グラスゴーと〔歴史のある〕エディンバラの間に見られる顕著なコントラストを考慮しなければならない。われわれはそのような革新的で手の込んだ調査を通して、近代の都市問題や政策を議論する段階に達するのだ。現在を過去の発展として理解することによって、現在の発展として未来を理解するための準備がされ

ているのではないだろうか。

〔▲〕訪問者たちがエディンバラの姿に強い印象を受けているのは、それが単に絵のようだからではない。見物人が気づいていてもいなくても、城壁や大聖堂の丸屋根を伴った中世の丘陵都市と、公園や広い並木道、商店やホテル、鉄道駅との対照に目を奪われる。歴史的なパノラマは申し分ない。湖や森によって守られていた丘陵の砦に目を向けよう。それは「占拠されたことのない要塞 (castrum puellarum)」になり、ローマ時代やアーサー王時代の城砦になった。そして中世には、数え切れないほど包囲攻撃を受け、独裁制や軍政下、寡頭政治下での執務のための拠点となったのである。そして最後には過去を記す博物館になったのだ。それはまた、都市自体についても同じように〔歴史的なパノラマを見せるの〕である。狭い尾根では、都市 (capital) にとって不可欠な機関^{オーガン}が1本の街路へと収斂し、近代の都市生活や近代都市の発展の概観がきわめて集約された形で現れている。このことは宗教的権力や世俗的権力 (spiritual and temporal powers)——これらの言い回しを物質的な秩序や非物質的な対応物を表すために最も広範な意味で使っている——の双方に関しても同様である。このように、中世の王や貴族の城はルネサンスを迎えると宮殿のようなものになる。そして産業革命とともに工場が取って代わり、あるいはビール工場へと変貌することになる。思弁的な思想の中心は、中世には大修道院に集中していたが、宗教改革での神学者たちの集会へ、そしてルネサンス期の大学へと移っていった。さらに名誉革命においてその大部分はヒューム (Hume) やスミス、さらにもっとも有名である思弁的な百科全書派へと引き継がれる。その後の発展は明らかだろう。後の世代のものでは、新古典主義 (neo-classic) の建築がフランス革命後の第一帝政の間にヨーロッパの至るところで出現した。しかし新古典主義への反動の顕著な例として〔ジョージ・ギルバート・〕スコットによるネオゴシック (neo-Gothic) の建造物を、次の世代によるロマン主義運動の一例として挙げる

ことができる。そしてオックスフォード運動に伴って、王党員の理想主義の（明らかに地域的な）復興を経験し、エディンバラにおいてもピューリタンの理念の同時的な復興を見る。例えば、エディンバラでは支配的に建造物が聳え立つようになった自由教会〔非国教派教会〕が挙げられる。自由主義の繁栄の後半は、大英帝国のヒロイックな熱狂としてその痕跡を残している。そしていまや社会進化の優勢な段階、つまり資本 (Finance) の段階となるに従って、銀行や各金融機関、新聞社の建物が増えていった。したがってエディンバラ旧市街は最も濃密な事例であり、社会進化の縮図を至る所に見ることができるのである。改良された衛生学がその医学的利点を教えていることを考えると、社会学的発展の学説モデル (teaching model) として教育上の魅力が刷新されてもいいだろう。

歴史的発展のこれらの段階を表の形でまとめると、次の図表 1 のようになる。帯状になっており、伸びてゆく幹の根元あるいはサンゴ礁の層の部分と比較することができる。そのいずれの世代も特徴的な不動の骨格を構成している。それは成長しながら一方で消えつつ、そして疲労しながら全体へ寄与している。私はエディンバラ旧市街の外観についての事例を文献調査という方法の例証として精巧に作り上げたつもりである。この文献調査によって、社会や都市の研究を簡便に始めることができよう。そして写真を使った調査にもできうる限り拡張してゆく価値があることを強調したい。私の見解では、社会学会は統計資料と同じくらい、少なくとも地図



〔図表 1〕

や計画、写真のコレクションを研究に使用する必要があると思われる。もちろん、これらのことで旅行者の誰もが程度知っていることを繰り返すことはしない。けれども、その印象や回想は体系だった政治統計学となりうる。特徴的な社会編成という観点から都市を調べ、都市の進化における偉大な産物——宗教的なものあるいは世俗的なもので、現在に至るすべての場所とすべての時間にある——に関する完全な描写に向けて、進化のそれぞれの段階の事例を利用することによって〔政治統計学となることは〕可能となる。したがって、都市そのものの歴史調査とその基礎にある地質の歴史調査の類似は比喩的なものでは決してなく、地図上の区域や図表を使ってほぼ同じ方法で理解できるはずである。事実、色使いや垂直面の尺度を除くと、ほとんど変化がない。実際に、一連の地図上に見られる、それぞれの時代の特徴的で必須な生活やその地域についての思想を表現する試みは、われわれが普段ほとんど考えずに見ている日常的な地図を理解するのに最良の方法なのである。

〔▲〕ここまで述べてきたことの多くは、治安や水利、財政などを扱う数多ある委員会の立場から都市を見ている人々にとって不満なものであろう。都市を生み、都市が向かっているところへの考察抜きに、大都市の富や人口、産業や製造業の巨大さを見ていることで満足している人々にとっても同様だろう。さらに市民としての威厳(civic dignity)や先人たち、あるいは勢力を持った政治団体の交代が最も重要だと考えている人々にとっても、同様に不満なのではないか。私が望みうることは、より専門的で発展的な関心を満たすための基本的で予備的な思案や研究として、ここまでの叙述で描き出そうとしてきた視点が価値のあるものだ、ということ考察によって確認することである。そして、もしこの学会の許すところであれば、それが唯一望みうることなのである。これらについては今後の論文でより綿密にアプローチしたい。

〔▲〕私の提案した論じ方は、抽象的なエコノミストや法曹関係者、道

徳哲学者や政治哲学者にとって、具体的な事柄^{ケース}に還元してしまう唯物論的
社会学 (materialise sociology) への試みだとして、怒りを買うだろう。
しかしながら観察は、解釈を排除することとは全く異なり、それ〔解釈〕
のために用意された手段にはかならないのだ、と回答しよう。今後、進化
についての生産的な書き手になるのは観察する自然研究者^{ナチュラリスト}であり、旅する
動物学者や植物学者なのである。歴史の哲学を切り開く最良の存在は歴史
家であるが、このことの裏を返せば、前科学的な状態に留まっていると
いうことでもある。それゆえ、抽象的で演繹的な経済学や政治学、道徳学
の体系を構築することがスコラ哲学にとって最後に残された場なのであ
る。〈都市学〉は〈科学〉としての側面から見たとき〈都市〉を扱う〈社
会学〉の一領域である。その起源と分類においても、そうである。その発
展と構造においてそうである。内的あるいは外的に、物質的にあるいは心
理学的に、その果たしている役割においてそうである。個人的あるいは協
働的な進化において、そうなのである。また応用科学である実践という側
面から見れば、〈都市学〉は実験的な試みを通して発展せねばならない。
その実験的な試みは都市の生命を高め、その進化を促進してゆく、ますま
す効果的な〈技芸〉へと至るためのものである。研究の第一として、具体
的で科学的であること、そうすればわれわれの哲学的眺望が開くことであ
ろう。そして第二に、実践的であること、そうすればわれわれの倫理的洞
察が深まることであろう。

〔▲〕私は当然のことながら、進化する生命^{リビング}ある自然を探究する研究者
に基本的なこととして、環境の変化や機能^{機能}の変化についての地理学的で歴
史的な調査という側面から都市にアプローチした。けれどもこのようなア
プローチは、エコノミストや政治家、さらには哲学者や道徳家によって行
われる抽象的な解釈へと進むためのステップではない。それはそれぞれの
都市^{シビック}の調査において、園芸家や建築家のように具体的で詳細な計画によっ
て、文字通りの地図をコーディネートする日常的な実践である。それゆえ

に、都市事業 (city's service) の中で必要とされる実践的な分業をせずともよいのである。推論的な思想家と実践家との距離は、お互いの余所余所しさが乗り越えられたとき、綺麗に消え去るのである。この国〔イギリス〕においては特に、現時点でほとんど無関係であるくらい離れた実践家との距離が消えるのである。進化論の研究者や従事者は、彼らの間のミッシングリンクとなり始めたのである。

C. 発達過程における市民

ここで都市の外的な調査——特徴的な建造物や顕著な様式という物質的な枠組みによるもの——から離れ、市民自身のより深層的な心理学的調査を、その発達 (development) 過程から始めることが好都合である。そしてわれわれの方法は、事実、そのような道筋で進めることになる。そこで、ある学校に立ち入ってみよう。新鮮な目で眺めれば、研究の極端な混乱〔バベルの塔状態〕は時間割やカリキュラムによって明らかで、それは山から海へという地理的な横断、あるいは過去から現在へという歴史的横断というどちらの視点によっても理解できない。しかし研究におけるこの空前の混乱は、教育者によって喧伝されている教育理論から離れ、新しい理論が得られたときに理解可能になる。その新しい理論はそれぞれの実践的あるいは推論的な側面、特に後の伝説や文学、儀式や慣例など先行する時代それぞれすべての遺物について要約することを試みるものである。計算に基づく過度の専門化、つまり三つの R〔読み、書き、計算〕の誇張は、安上がりで有能な事務員が欲しい、という要望の産物であり、現代的な資本の時代 (financial period) の特徴である。

記憶の相互関係や肉体的修練を問う試験という儀式は帝国体制下に発達したものであり、歴史的にはナポレオン時代以来のものである。混沌とした「一般的知識 (general knowledge)」というものは百科全書の時代の遺物である。いわゆる、フランス革命と解放運動一般の遺物なのである。ラ

テン語文法や韻文はルネサンス期の遺物である。不合理なスペリングが忠実に残されているのは、融通がきかない読者による模写だからなのだ。エッセーは中世の討論を要約した形だ。ただヴァージル (Virgil) やタキトゥス (Tacitus) の作品への純粋な感情移入——千人にひとりにはホメロス (Homer) やプラトン (Plato) にもする——だけが正しくローマ時代やギリシャ時代のものである。宗教的な命令は中世の教会や宗教改革による再解釈であるが、それらは未だに、父権文学の最良の要素のいくつかとしてその力を保持している。一方で御伽噺は学習という上から加わる重みを時に緩和するものであり、母権体制から子供への遺産である。最後に、〔学習として押し掛かる〕本まるごとの負荷の原因であるリングやボール〔弾丸〕は、次のように要約を仕上げる。原始人にとっては〔万有引力の法則の象徴も〕、片や単なる果実であり、片や手頃な飛び道具なのである。われわれの子供は彼もしくは彼の教師がふつつ気づいている以上に、すべての年代のまったき後継者である。〔生徒たちが〕学校に熟達しようとする奮闘は、一時的な争いなのではなく、終わりにき戦いなのである。ある者はそれを減らすよりも増やすように運命づけられている。このようなところには、それが健康なものであれ病的なものであれ、善き遺伝や悪しき隔世遺伝の力すべての絶え間ない衝突や、すべての新しい変種間での絶え間ない衝突があるのである。

D. 現時点の応用社会学

現在の都市とその所産は、過去の遺物やその再現物が綺麗に地層のように積み重なっているものであることを、示している。現在では、〔古い〕時代のあり方を厳格に守っているような純朴な類型〔の人々〕はほとんどいない。われわれは皆、多かれ少なかれ交じり合い、近代化されている。それでもなお、世俗的あるいは宗教的な強い衝動により、パンか名誉のために、それぞれ大概は実践的にその秩序を守り、自らが所属する社会編成

の一員として行動する。実践的な都市学の問い——それは応用社会学の問いであり、個々人や組織体それぞれの利害について問いである——は、広く定義されてよい。その問いは、特定の歴史的な類型や、^{シビック}市民全体の社会編成、そして社会的影響を重視するのである。実際にこれらが支配的でない〔と強調する〕にしても、それが可能な限りの範囲で重視する。われわれはみな進歩のために存在しているが、しかし各々はそれぞれのやり方で〔進歩を〕定義する。それゆえに、産業エネルギー業界の人がさらなる工場とスラムを建設すれば、その人々へビールを供給するためにさらなるビール醸造所をつくる人もいる。そして市議会あるいは国会の方針というのも、意識的あるいは無意識的に、こうした動きと一致している。代議制の政府は、その考案者〔である市民〕が望むものすべてを与えることなどできない。政府は単純に多数派の代表であるからだ。そして周知の事柄となっているもっともな真実がある。自治体は、より大きな政府と同様に、われわれにとってさらに悪いものとなることもありうるのである。社会編成は具体的な活動を通して、^{シビック}市民全体に影響力を及ぼす。そして、それぞれの考え方や理念は、位置と〔権〕力を勝ち取る。かつては、主に個人を直接的に罰する法律や刑罰の考え方と、被害を救済しようとする慈善的な考え方が、主要な位置を競っていた。現在では、〔被害という〕結果を待つことに代わって原因を治療するために、衛生的な営為や教育的な営為が続けられている。そのような営為は、いまだに思考においては曖昧すぎ、実践においては未熟すぎる。衛生や教育、禁酒の熱心な推進者は、これらに回答できる多くのものを有しているかもしれない。しかしそうであっても、俗物だろうが審美家だろうが、ユートピア主義者だろうが皮肉家だろうが、政党政治家だろうが「一匹狼」だろうが、現実の^{シビック}市政のフィールドの外側に立つ者なのだ。これらすべての極端な人々の間で中道路線を探ることが、^{シビック}都市調査や^{シビック}市政事業への統一的な後押しとなるのである。

われわれは現実の都市において、将来の市民として、次のことを観察す

る。われわれの行動は一般的に過去あるいは現在の社会編成によって形成されるものであり、それゆえに、関心や調査が向けられるのは現在あるいは以前の都市であることがわかるのである。現実の政党政治においてさえ、ロンドンのピューリタンやオックスフォードの王党員のライバルがどれだけ連続的に存在したかに気づくだろう。しかしこのことを知るのは依然として、思想や行動の歴史を通してであることを、より熱心な人ならば、はっきりと知っている。なぜなら、ピューリタンは法やエルサレムの預言者に、そして学者はアテネにシンパシーを感じるということが、信念や決意の最も重要な契機だからである。さもないと、最初のフランスの共和主義者かあるいは最後の帝国主義者かもしれない行動の人は、同時期のパリの発展からインスピレーションを引き出している。われわれの思考は擬人的でありまたそうあるべきだということならば、心理学においてありふれたことである。擬似ヘブライ化 (Hebraomorphic) や擬似ヘレニズム化 (Hellenomorphic), 擬似ラテン化 (Latinomorphic) など順を追うのは、歴史においてありふれたことである。

発明や発見、慣習や立法、政策や宗教を探究する歴史家は、言語や美術を扱う歴史家と同様に、このような見方をうまく使う。しかしながら、われわれが共通して必要としているものは、こうした見方を明瞭に都市や組織、街路や学校、住居に適用することなのである。さらに、わずかな私的支出や公的支出の決定にも、われわれは増大傾向にある支出やその効用について決定しているかどうかを正確にわかるまで適用する。それには、復興したフィレンツェや退廃的なベルサイユという影響力のある見本がある。このような意識はどんなに呼び起こしても危険ではない。われわれは歴史上の極端な例を使わなくなってから、潜在意識的にまた自動的に、末期の低発展を忠実に続けそして拡大しているのである。

E. 都市、現在と未来

われわれは自由主義と帝国主義の世代を経て、富やその偉大さの拡大において幸福となったので、現実の環境を自覚するような調査を講じることにより、市民の^{シビック}関心を一新できる。まず、地域的な要素の地図を作り、そしてそれを歴史的に解釈するのである。それは悲しいかな、神聖なあるいは古典的な伝統のある都市、もしくはそれらの後に続く中世やルネサンス時代の都市を対象とするだけではない。中世の^{ゲットー}スラム街や石炭積み下ろし用のワッピング突堤 (Wapping Stairs)、ランカシャーの工場群やバーミンガムを中心とする大工業地帯 (the Black Country) などの拡大、王政復古時代のロンドンにおいて粗野で浮かれた陽気によって消されてしまったもの、イタリアルネサンスやフランスルネサンスの粗悪な遺物によって装飾されたもの、これらもまた対象とされるのである。地理学や歴史から「採り入れられたもの」や「省かれたもの」についての都市をめぐる議論には、もはや疑問はない。われわれは、ジュールダン (Jourdain) 氏〔モリエールの喜劇『町人貴族』の主人公〕が散文について言っているように「何てことだ！もう 40 年以上も散文を使っていたのに、全然気づかなかったのか！」『モリエール全集第 8 巻』（臨川書店、2001 年）〕、これらについてあまりに長い間、無自覚だったのである。

しかしながら、来たるべき未来とは何だろうか。注意深い観察者が、既成かあるいは形成途中の来たる社会的発展の兆しやつぼみ (germs and buds) を見つけることはないのだろうか。それとも、思索家が社会学的な原理から演繹して見つけないだろうか。私はいずれも大いに可能性があると思っている。けれども、いずれも範囲が限定されており正当化できない。現時点では、実践家が、現在の自らの考え方や行動が過去の産物であると意識していないことが認められ、そして都市において自然条件を把握した範囲内で働いていることが認められるならば、それで十分である。

都市の生命 (city's life) における地理的要素と歴史的要素がわかるということは、現在についての理解を進める最初のステップである。それは未

来の科学的予測を試みるのに不可欠なものである。そしてこれは、単純なユートピア主義の危険をできる限り回避せねばならないということなのである。

F. 都市学の文献

〈都市学〉の予備的で基本的な議論において、今もなお増え続けている都市についての文献の考察を省くことはできない。しかし、それはどのように利用することができるのだろうか。また、それはいかに継続するのだろうか。さらにそれは、どのように都市それぞれに必要とされている独立でオリジナルな調査としてコーディネートされるのだろうか。そして、過去と現在に関する全体的な知識を、いかに^{シビック}市政行動へと応用するのだろうか。

その回答は、具体的なものでなければならない。しかしながら、どんなに小さな都市でも、すべての都市には、過去の^{トポグラフィー}地誌学や歴史についての豊富な文献がある。それは多量なもので、その単なる^{ビブリオグラフィー}文献情報だけで見事な書物となっている*。その中に新たな情報が加えられることを専門家は待ち望んでいる。この大量の文献は、包括的なモノグラフのための資料として考えられることになるだろう。それは多くの都市において誇りに思えるような地図や図版に富んだモノグラフである。これはガイドブックとして簡約されてもよいだろう。ガイドブックはその記述と歴史的な詳細において秀でたものであり、ますます解釈的になっている。それは特にグラント・アレン (Grant Allen) 氏が、その進化論的な洞察と説明の明快さを、自然史から都市史 (civic history) へと移入して以来のことである。

* 原注 例えば、アースカイン・ベバリッジ (Erskine Beveridge) (法学博士) 『ダンファームリン文献情報 (Bibliography of Dunfermline)』ダンファームリン、1902年、全8巻。

地理的環境と歴史的発展についての一般的で予備的な調査に続いて、補足的に現代を対象にする書物のための資料が現れ始める。それは〈社会調査 (Social Survey)〉専門のものである。この統計的な資料は、議会や自治体によるレポートや報告書、経済学雑誌などの中に部分的に見られる。しかし、斬新でオリジナルな詳しい調査が明らかに必要とされている。こうした文献として、ブース氏の金字塔である〈ロンドン調査〉、それに続くロウントリー (Rowntree) 氏によるヨーク調査などは、多くの人を刺激し暗示的であった。それゆえに、都市を対象とした〈社会調査〉は、現在のガイドブックのように簡便で手間なく入手できるものになる、ということが間違いなく予期できるのである。人々の現況についての合理的に設計された人口調査^{センサス}、つまり職業や実収入、家計や文化レベルに関する調査は、一方で容易に確認できるようにすべきであり、他方で、その前提が理解され、不朽の業績を訪れることができるようにすべきである。

けれどもこの二巻本、『都市——過去と現在』は十分ではない。来たる〈都市の未来 (Civic Future)〉についての第三巻が想像でき、また実現可能なのではないだろうか。その場所の過去や現在についてのすべての記述、そこに生じたことについてのすべての記述、そして今いる人々についての——つまり職業、家族、組織、その考え方や理念などに関する——すべての記述、これらを記載することで、実際のあるいは潜在的な発展についての何かをある程度まで見分け、次に根気強く綿密に計画し、そして大胆な提案をすることができないのだろうか。そのような不分別や計画は、当然ながら近い将来のためであるので、より関係が薄くより重要な問題——都市の (city's) 無限に長い歴史^{ライフ}とそれに相応して求められる未来予測、そして政治手腕を伴うもの——を考慮に入れねばならないだろう。このような問題を扱う書物は、伝統的な「ユートピアの文献〔文学〕」とは大きく異なっている。それが異なるのは、非-地域的 (non-regional) もしくは没-地域的 (ir-regional) であることに代わり地域的 (regional) である

こと、また、全く実現できず達成できないことに代わり実現可能であること、というところである。このような書物は、実行可能な代替選択肢を指し示すだろう。また、現在ある都市において、正統な《真のユートピア (Eu-topia)》の発展様式を選択し、あるいは定義し特徴づけることだろう。それゆえに、具体的にはどこにも実現していない曖昧な《オートピア (Ou-topia)》とは、明らかに異なるものなのである。このような理想都市 (the ideal city) の描写という抽象的な完徳の勧めは、アウグスティヌス (Augustine) からモア (More)、カンパネラ (Campanella)、ベーコン (Bacon) を経て、モリス (Morris) に至るまで、多くの人々やその他の示唆を受けた人々の慰めとなってきた。それでもなお、〈ユートピア〉と都市改良のための計画は別のものなのである。

そのような未来についての書物のための具体的な資料は、まだ断片的なものであっても、都市工学者 (the city engineer) と公衆衛生の行政官、建築物の管理者と公園の管理者などの間に四散しながらでも、すべての市役所にあるべきである。一方で、私的な建築や風景を扱う園芸家や、芸術家、時には市民投票の選挙人や被選挙人でさえ、みな理想都市について自分たち自身の考えを有しているだろう。しかしながら、われわれの都市は全体的に無計画で、荒廃していないとしても、その成長は単なる無頓着な増大と凝集よりも幾分ましなものに過ぎない。アメリカやドイツの都市は、包括的な拡大と内的改良についての事例として与えられているのだ。イギリスの都市を改良するための試みは、その歴史の側面すべてを包括しているのではなく、ある程度までは詳述され熟考されたものである。あるいは、これまで論じてきたように、過去と現在を未来へとつなぐことについて述べられているものである。私はこのイギリスの都市を改良する試みとして、ある都市における実践的な可能性について、現在の立場での考察に適した最近の研究報告書を、カーネギー・ダンファームリン財団から許可を得てわれわれの学会の図書館に並べた。この研究では極端ではなく容

易く理解できる範囲内で、工業と文化両面にわたり、際立った歴史的利害のコンビネーション、そして現在ある行動と起こりつつある行動とのコンビネーションが、望ましい都市の^{シビックアウトルック}展望とともに提示されている。

このような社会調査と社会事業との相互調整 (co-adjustment) を、応用社会学としての都市学に不可欠のものとしてここまで論じてきた。これは抽象的な原理ではなく、具体的で実践的な方法である。しかし、それは応用の一般性 (generality) を失っているというものではない。なぜならば、われわれが辿りついたことは、まさに『都市百科事典 (Encyclopædia Civica)』という構想であり、それは都市それぞれに、〈過去、現在、未来の三部作〉が捧げられるものなのである。さらにその先では、^{ライフ}歴史が書物を越えてゆき、われわれは^{シビック}市民の意識や良心の成長、つまり^{シビックルネサンス}都市再生に向かう^{シティズンシップ}市民意識の目覚めを思い描くことができるであろう。そのような都市学の書物はすべて次のことを含意し示唆するだろう。^{ライフ}生命はつねに文献の中に相応しい表現を生み出し、そして、文献は^{ライフ}生命の高尚さを反映していると。

私が提案した都市三部作 (civic trilogy) の完全なものはどの都市にもまだない。しかしその例として依拠されるような特定の書物にある欠点を除けば、三つの要素を持つシリーズを構想することは有益だろう。なぜなら、これは社会学的である同時に^{シビック}都市学的^スでもあり、連続的に全体を提示するはずだからである。それは、歴史的文化に詳しい学者や教育者、現実の事柄に熟達した行動をする人、未来のヴィジョンに関する思想家などによる見解や情報、芸術家によるデザインの助けを借りて、コーディネートされる。それゆえに、都市の成長する遺産の中で徐々に、市民の^{ライフ}生活を豊かにするものである。

注記：ゲデス教授は、特定の都市への具体的な応用、そして社会学的方法および上記論文で示された原理の例として、近年カーネギー氏によって設立された財

都市学：応用社会学としての試み

団のもと、ダンファームリンの改良に向けた研究とデザインの結論をまとめた写真入りの書物を発表した。これはすでに以下のように公刊されている。
P. ゲデス『都市の発展 (City Development)』パーク・ガーデンズ&文化研究所；カーネギー・ダンファームリン財団への報告書，138 枚の図版込み，エディンバラ etc., 1904 年。

(皆吉淳平訳)

“Discussion,” *Sociological Papers 1904* (1905): 119–129.

議論

議長（チャールズ・ブース氏）の議論冒頭での発言

われわれが、いま聞いた論文は興味深いテーマに関する最も完全で魅力的な論文の一つです。私は皆さん全員がこのことに賛成してくれることと思います。そして、これからの議論では、この論文で示されたことを踏まえて、可能であれば、そこに豊かな考え方を付加されることを望みます。

エベネザー・ハワード (Ebenezer Howard) 氏

（田園都市協会 (the Garden City Association) の設立者）の発言

私はゲデス教授の驚くほど聡明で絵のように美しい論文を、草稿で繰り返し拝読し、とても興味を持ちました。彼はわれわれに、都市の発展に関する地理的な過程の生き生きとした記述を示してくれました。われわれはこの論文を読んで、都市に通じる川にその流れが絶えず注ぎこんでいるように、丘の上から谷へと人々が流れ、都市が徐々に成長し、増大していく過程を鮮明に想像することができます。しかし、大きな都市の上空に流れこみ、空から降ってくるというところに、増大した川の流れと増大した人々の流れとの間の根本的な違いはないのでしょうか。水は都市を流れ、巨大な海へと注ぎ、それから徐々に集まって柔らかい雲となり、丘の上を再び漂い、そこから、再び谷へと流れ込みます。しかし、男性や女性や子

供という人の流れは地方側から発し、活動的で活力ある健康的な生活を地方で送ることをますますできない状態にしています。大都市へと絶えず流れこむ人の流れは「大地を覆うために再び戻ってくる」水とは違います。少なくとも大多数の人にとって地方での滞在はよくても非常に短いものになり、それ以上の長さになる見込みはありません。人々の流れは抵抗なく流れていき、われわれのすでに定員いっぱいの共同住宅をさらに込みあったものにし、大きくなり過ぎた都市をさらに拡大し、郊外がさらに拡大し、人々の忙しい生活の近くにかつてあった美しい野原や小高い坂をさらに覆い隠し、空気をさらに汚れたものにし、社会改良家の仕事をさらに難しいものにしています。

しかし、われわれは地方の人口流出と都市の人口集中という二つの問題を解決するために、健全なバランスが回復するまで都市から地方へと帰る人々の流れを生み出す必要があります。そのためにわれわれの何人かがすでに自然の大地に魅了され、そこへ帰っていく道筋を創り出すという〈自然〉の技術や恵みを手本にした方法があるのは確かであり、われわれはそれを見つけるかもしれません。

私はこのことに関してゲデス教授の論文の第二節である「都市についての歴史的調査」に注目しました。教授はわれわれにどのようにして一つの文明の痕跡が地層のようにもう一つの文明の上に積み重なっていくのかを気づかせてくれました。そしてわれわれに尋ねました。「現在を過去の発展として理解することによって、現在の発展として未来を理解するための準備がされているのではないだろうか」〔B 節〕。この考えの流れに沿って、私は次のようなことを思いきって提案します。それは、われわれが生きている時代が大きく、ぎっしりと凝縮された、込み合った都市の時代である一方、来るべき変化の兆候はすでに存在しているということです。そして、その変化はとても重大なので、20 世紀は大地へと帰る大移動の時代として、また「社会事業のための社会調査」によって得られた知識を応

用する人々の多大な努力によって文明の新しい構造 (fabric) が現れる時代として、知られることになるだろうということです。では、その兆候とはなんでしょうか。われわれはゲデス教授の図表の中の「未来 (Incipient)」の下にどんな言葉を置くことができるのでしょうか。私はゲデス教授の疑問符の一つの代わりに、ポートサンライト (Port Sunlight) やボーンビル (Bournville)、そして〈田園都市 (Garden City)〉に代表される、大きな、しかしまだ始まったばかりの運動として工業の分散 (Decentralisation of Industry) を挙げられるかもしれないと提案したいと思います。なぜなら、今、工業の分散に役に立つ多くの機関が活動中だからです。工業はその敷地に払うべき度を越した使用料や賃貸料によって、また一階建ての近代的な工場の用地や労働者の家屋のための十分な用地を得ることが難しいということによって、大きな町から追い出されているところです。もし、イギリスが世界の国々の中で現在の地位を維持したいのなら、それらは今ある工場や家屋とは大きく異なったものになるに違いありません。そして工場は都市から追い出されている一方で、その新しく発見された可能性によって地方に魅了されてもいます。ワリントン (Warrington) を閉め出されたレバー兄弟 (Lever Brothers) は全く新しい町をポートサンライトの新しい場所に建設しました。そして、その用地は新しく、未開発だったので、レバー氏が工業や健康や宅地の観点から見て最もよく、望ましい条件で小さな町を計画することができました。ボーンビルの実事もそれと同様です。ボーンビルは世界で最も美しい村の一つです。それは、明確な目的のもとで建設される村のための新しい用地をもたらす可能性があるからです。そこでは、人口集中を徐々に、そして永久に防ぐことができ、工場内の仕事が田園での仕事によって変わるようになるのです。これらのよくできた実験がわが国で進められているからには、新しい用地に新しい工業を建設し、その周りを健康的な家々で囲むという考え方をすべきではないでしょうか。さらに広範に関連する目的を伴ってより大規模に展開すべきで

あり、その意味でも小さな工場主が雇い主と従業員がともに利益があると証明された運動に参加することを可能するよう展開をすべきではないでしょうか。このような考え方から〈田園都市〉の理念が生まれ、その理念が今、実現する途上にあるのです。ボーンビルやポートサンライトの十倍近くある、3,800 エーカーの土地はヒッチン (Hitchin) の町から鉄道の支線で西に2マイル行ったケンブリッジとの間にあるハートフォードシャー (Hertfordshire) に得ることができました。国 (State) の援助を得ることはうんざりする仕事になるということで求めませんでした。田園都市協会の不屈の努力によって開発公社 (a company) が組織され、町の計画が注意深く準備されました。その計画とはもちろん次のようなものです。(当初の予定では5フィートの高さをすべて変えるという案が示された) 土地の外形に関する計画。木立や絵のように美しいノートン (Norton) やウィリアン (Willian) の村々にあるような自然の美しさを維持するための計画。鉄道の側線や駅の必要に関する計画では、それらはグレート・ノーザン鉄道 (Great Northern Railway) のおかげですでに設置済みです。どこにでも行ける余裕ができるような緩やかな傾斜と適した幅を持つ道路の建設に関する計画。われわれの水の供給地を汚染から慎重に保護することに関する計画。水は豊富にあることが確認済みであります。適した高さにある貯水池に関する計画。これも現在、建設中であります。排水のシステムに関する計画。現在工事が着手され始めています。町の中の公園や遊び場の用意に関する計画。同様に町の周りにある広い農業地帯に関する計画。広い庭付きの3万人が住める住宅用地のための計画。約6個のコテージがすでに開発公社 (the Company) でなく、私企業 (private enterprise) によって建設されており、同時に他の多くのコテージも現在建設が着手され始めています。学校や教会やその他の公共施設のための用地を残しておくことに関する計画。同時に町への動力 (motive power) の供給と町の照明も準備中であります。

私が概要を述べた計画はもちろんイギリス人 (The British race) にとって大胆すぎたり、包括的すぎたりしないでしょう。もし病気や汚染や貧困や過密に対して偉大な市民戦争をしているわれわれ市民自身の手によって——日本とロシアが現在行っている大きな戦争で示されている組織化された技術の百分の1でも示されれば——われわれは最良の手本を多くの新しい場所に建設するだけでなく、古い町を新しく、よりよい状態 (the new and better order) へと導くことができるでしょう。私はゲデス教授が、田園都市協会とその最初の成果である田園都市公社 (the Garden City Company) が田園都市の考えを広めてくれることを望んでいることを知っています。そして、皆さん全員にとって永続する成功は、カーネギー氏からのダンファームリン市に対する500万ドルという寛大な贈り物に報いることです。そしてわれわれに市民として、国民として、英帝国臣民としての幸福を確保するために、近代的な技術と科学そして技芸を利用することによって古代の都市であるダンファームリンを光溢れる愛の中心にしようとしているカーネギー財団 (Trustees) やゲデス教授の努力に報いることである、という願いを皆さん全員が私とともに持っているであろうことを確信しています。

C. H. グリンリン (Grinling) 氏の発言

エベネザー・ハワード氏は、多くの聴衆も同じように思っているでしょうが、ゲデス教授から得た新しいインスピレーションをいくつも描いて見せてくれました。しかし、それは教授が明らかにしようとし、強調しようとした課題の一側面でしかありません。教授は展望塔 (Outlook Tower) の名のもとに、彼がエディンバラで設立し、発展させてきた社会学の学校 (the School of Sociology) に関連して成長した社会学研究所 (the sociological institute) について言及していました。この研究所は教育のための機関であり、調査のための機関でもあり、社会教育のための機関でもあ

り、^{シビック}市政行動のための機関でもありました。実際それは都市学の基礎——「社会事業のための社会調査」——として論文で指し示されている原理の、具体的で実用的な応用でした。教授は展望塔が、設置されたどの地方においてもあらゆる側面から利用されるように設計された施設であることを理解し、社会学研究所や展望塔なしにはどの地方も立ちゆかないので、社会学会 (Sociological Society) にそれらの拡張を主張するように強く迫りました。

もし、個人一人でそんなに多くのことを達成できるのなら、ゲデス教授の論文を通して提案されている今日大いに必要とされていることを、それぞれの地域に密着している今日の社会学者によって達成できないことがあるのでしょうか。そして、人はこの種の論文が単に議論を導くだけでなく、この種の結果を集め、他の人にインスピレーションを与え、さらに未来の社会学者が解釈するための宝を蓄えておく仕事人 (workers) に至ることを望んでいます。このように社会学会は、世紀を越えてすべての一流の頭脳に常に影響を与える単なる科学の学会になるだけでなく、ゲデス教授がしたように、社会学会が設立され、発展させたこの種の仕事をあらゆる場所の仕事人の集団に対して与えるインスピレーションでもあるべきでしょう。

J. M. ロバートソン (Robertson) 氏の発言

私は最初に、この大変興味深く、刺激的な論文に賛辞を贈りたいと思います。私は今では広く知られているこれらの考えを、何年も前にゲデス教授がエディンバラで初めて明確に述べた後に、談笑していた姿を思い出しています。しかしながら、私はいくつか批判を述べさせていただきたいと思います。この論文は大まかに言えば、生物学者の見方を社会学に応用したものです。それはダーウィン (Darwin) の応用というよりもむしろフォン・ベア (Von Baer) [ダーウィンとほぼ同時代の発生学者] の応用で

す。ゲデス教授は論文を初歩的な準備の一つとして特徴づけて、社会学における一連の研究のなかで予備的研究の一部を形成するだろう論文を寄稿しました。その論文は「都市学——応用社会学としての試み」というタイトルを全く証明していません。応用は始まらなかったのです。多少信用を落としている一般的知識という百科全書の知見を、起源の中心であるすべての都市や村の自然史 (natural history) に関する百科辞典の計画に利用するかもしれません。この原子論は社会学には役立たないでしょう。社会学者がそれらすべてを習得しなければならないなら、社会学者の負担は大きくなるだけでしょうし、われわれが応用社会学を手に入れることは決してないでしょう。この流れに沿っていくとある進化の段階に注意をとどめ、その注意がそこから動かなくなるという危険もあります。真の原理とは進化は永遠であり、連続しているということであり、皆さんが学校で一般的知識の伝達をするとき、またそれをフランスの〈百科全書〉から派生したものであると呼ぶときに害が起こる可能性があるとは私は考えています。ではなぜそれはそのままにされているのでしょうか。それはどこから来たのでしょうか。もしあなたが都市形成の単純な進化の跡を辿るなら、それがどのように生じたかを辿るとしたら、〈百科全書〉によって与えられた説明を見ることにためらうことはないでしょう。これはそうしたことの遺物です。そうしたことはその他のものの遺物です。フランスの〈百科全書〉は中世やセビリアのイシドルス (Isidore of Seville) の時代にまで遡らなければならないでしょう。そしてそこには関連しているものと類似点とを混同するという初期の植物学が陥った危険と同じような危険があるのではないかと私は考えています。中心から放射状に伸びた通りをもつパリのエトワール広場は計画林の案から進化したものであると推測することは大変興味深いのですが、そこに何か歴史的関係を見出すことは難しいでしょう。そのことは証明できません。

もちろん、重要な疑問はこの進化の追跡ではありません。その疑問と

は、「都市学」は形態の研究 (the study of forms) だけなのか、ということです。もしそうであるならば、社会学は死んだ科学であり、クレイン氏が論文で書いた提案によって生命を与えられるまで実用的なよさはほとんどないでしょう。ウォルター・クレイン (Walter Crane) 氏は「あなたは政治問題に取り組むことなしにどのようにして市民生活の価値を形成するのですか」という極めて重要な質問を投げかけました。私はゲデス教授がもう一つの論文で未来の都市学を扱うことを約束したことを忘れてはいませんが、その論文では政治問題に取り組まなければならないだろうということを主張します。教授が言うように、都市とは単なる場所^{プレイス}ではなく、「時の流れにおけるドラマ」なのです [B 節]。歴史を学ぶ社会学の研究者に対する疑問は、富や行われているサービスの不平等はどのようにして起こるのか、そして未来においてそれをどのようにして防ぐことができるのか、ということです。これはわれわれが、たとえ生命に関する興味から社会学を学ぶにしても、研究しなければならない問題なのです。進歩の定義は社会学において真の第一歩になるのです。ゲデス教授は次の論文でわれわれに進歩の定義を与えるべきですし、多くの町の考古学的研究を増やすことよりも、われわれは強^{ダイナミック}力な同意を得るために進歩の定義と闘い始めることのほうがよいのです。私はそうした考古学的研究が面白いということは認めます。南アフリカを旅した時、私はたびたびどのようにしてコミュニティが始まったのか、例えば、あの村やこの村の核 (nucleus) となっているものは何なのか、を収集しようとしたことがあります。そこでは中心という考えがほとんどないということに、とても驚きました。しかしながら、私はわれわれ全員がそうした調査を膨大に蓄積していくべきだという考えには賛成できません。ブース氏のロンドンにおける貧民の生活の困難さに関する見事な調査は、長年にわたる研究ではありますが、それ自体でロンドンの問題の解決に何らかの推進力を与えることはないのです。それは単に一般的知識に正確な知識を与えるだけなのです。社会学の問題

は一般的知識に則って生じました。私は社会学の仕事があつた特別な知識に、もしくはより一般的な知識に則って行われていた行為の刺激 (the stimulation of action) に取って代わつてこの賞賛に値する研究の拡大を招くのではないかと恐れています。われわれは多くの貧困が存在していることやそれがどのように引き起こされたのかについて知っています。われわれは未来においてそこからどのようにして抜け出すのかという理想を持っていますが、私の疑問は、細部にわたる収集や社会的に規定された慣習は果たして社会学会が取り上げるべき種類の活動なのかどうか、ということです。

トーマス・バークレイ (Thomas Barclay) 卿の発言

私は「進歩」もしくは「文明化 (civilization)」を定義することが望ましいとするロバートソン氏に賛成すべきかどうか確信がもてません。一般的に、そうした機会はそれらの意味している厳密な概念の中よりもそれが構成している思考の大きな変化の中に存在しています。それらは努力の向かうべき対象が何であるのかという一般化です。しかし、私は「都市学」が地方自治の努力の単なる表面上の一部であるというゲデス教授の限定にも賛成できません。アメリカでは「市政学 (civics)」という言葉は市民の権利や義務に応用されており、ゲデス教授には〈都市学 (Civics)〉の中に市民の生活と都市の外見上の改良との関連を含んでほしいと思います。しかしながら、実践家であるゲデス教授は自分自身に課した課題の理論的観点よりもその現実を扱うだろうと確信しています。エディンバラがとても多くの人々に認めてもらえるのはゲデス教授のおかげです。私はエディンバラの中でラムゼー・ロッジ (Ramsay Lodge) が最も美しく飾られたキャッスル・ヒル (Castle Hill) の一つであると考えています。私は、私自身の故郷であるダンファームリンで、彼がもっと見事な仕事をするように成功することを望んでいます。私の友人であるカーネギー氏は彼の故

郷でもある都市〔ダンファームリン〕において、すべての都市のために何
をすることができるのかを、具体的なレッスンによって示そうとしている
のだと私は思います。ゲデス教授はこの研究において、その提案を示すこ
とによって彼を助けているのです。私はそれらが実行されることを望んで
います。アメリカにはとても美しい都市がいくつもあります。真の田園都
市であるワシントンは誰も忘れることができないでしょう。アメリカに
は、無数の人々の住宅を美化し健全化する（つまりバーバリズムを許す）
ためにばらまかれるお金はありません。美しい都市は健康、知性、想像力
への投資です。世界中のすべての天才は都市、特に美しい都市と関係して
います。美しいものの中で成長することは人々を高尚にします。しかし、
私はゲデス教授にダンファームリンでの計画をそこに住む人々自身へと広
げてほしいと思います。皆さん方のほとんどはヘンダーソン (Henderson)
氏が子供たちの世話に関してエディンバラ警察を利用したことを知ってい
ます。この地方の未来は彼ら子供たちにかかっているのです。この問題は
とても重大なので無関心な両親のでたらめな慈悲に子供を任せ続けること
はしません。生まれてきたすべての子供たちは共同体を善くも悪くも導く
者であり、共同体は子供がどのように育てられるのか、そして子供の生活
状態、その子の性格や性向が生み出された環境を無視するわけにはいきま
せん。必要は発明の母かもしれませんが、食糧や衣服の不足は子供たち
に、共同体にとって好ましくない発明の才能を発達させることになりま
す。このことは、エディンバラでヘンダーソン氏の体制の時になされたよ
うに、私的な決定権に委ねるには重大すぎる問題のように思われます。い
やほかのどこでも、子供たちを有害な環境から守るための私的な決定権が
行使されることはほとんどありません。端的に言って、私は〈都市学〉
が、我が友ゲデス教授が扱うような意味で一つの完結した対象 (a com-
plete subject) であるとは考えていません。私の考えでは、〈都市学〉は
市民に関係するすべてのものを含んでいるのです。次から次へと出される

指令によって至る所で人々の能力は高まり、繁栄し、幸せになっています。アメリカでは幸せが学校で教えられています。すべての学校教師の第一の義務は幸せの基準を示すことです。例えば、ニコニコ笑うことには勇気づけられますが、憂鬱な顔が人生における重大な事柄にとって必要なものであるということは考えられません。実際、憂鬱な顔は失格であり、失敗や不運や卑しい性格と関連しています。ドイツでは、教師が最初の段階の身体の特レーナーです。教師の最も重要な義務の一つは視力の低下を見張りそして防ぎ、肺の発達を助け、背骨の変形を防ぐことです。教師の仕事の二番目は子供の性格を監視することであり、そしてやっと三番目の仕事として小さく貧弱な頭に知識を詰め込むことがあります。そして皆さんが行くところなら世界中どこでも、私が理解しているような「都市学」に沿ってなされているものを発見できるでしょう。私はゲデス教授がダンファームリンでしてくれたことに感謝しています。そしてゲデス教授が、定義せずともわかるくらいに「進歩」を理解することを望みます。

(篠 大輔訳)

ライオネル・タイラー (J. Lionel Tayler) 博士

(『社会進化の諸側面 (Aspects of Social Evolution)』の著者) の発言

私は都市の発展を調査する基礎として組織的で地理学的な研究の重要性について、ゲデス教授に賛成します。けれどもこれらの環境の中で生まれ存在する、あるいは単に居住しているすべての個人の《自然な》特性の詳細な説明を伴ってそれらの研究が行われなければ、社会にとって最高の価値があるということを証明できないように思えます。しかしながら、町の成長の様々な段階をその始まりから現在まで厳密に描くことだけでは十分ではありません。なぜなら、いかなる都市凝集の進化の《原因》も、より深いところに存在しているのであり、それは特質において生命がない (in-animate) わけではなく、広い部分で活動的である (animate) からです。

いずれにせよ環境の価値は、環境自身の特色と同程度に、市民個人が——単独あるいは集団で——触れたものを利用する能力によっています。場所、伝統、社会組織、諸個人の発達、教育、これらは町の進化における見落とすことのできない要因で、時代や場所によって大きく異なっています。

もしイギリスの大きな町の住民をフランスの同程度の町の住民と完全に交換することができるのなら、二つのグループの次のような変化が多かれ少なかれ速やかに観察できるでしょう。(1) フランス人とイギリス人の市民たちは新しい状況に適応することを望み、そして可能であればそうなる。あるいは、(2) 地理的な位置にかかわらず、両方の町の特徴は交換した人間の必要に応じて徐々に変化していくのです。同様に本来、非文化的で進歩していない人々によって構成されていた町は、機敏な市民が町の活動を続けた場合よりも、町の非文化的で進歩していない特徴を保持しようとするでしょう。すべての職業と商業は自身の社会環境 (social atmosphere) を育成しようとし、そして町は産業生活とともに変わり、この環境に好意的な人々は町にやって来るでしょうし、否定的な人々は町を去っていくでしょう。《これらの変わりゆく市民が彼らを取り巻く環境に従って行動し、反応し、時代が変わるごとに彼らの力が及ぶ限り変化するにつれて、彼らは自分たちが住む状況の中で真の進化したもの (real evolvers) となるのです》。従って、われわれが都市の成長を理解したいのなら、研究から市民を書き落としてはいけません。

換言すれば、私はすべての都市の調査と田園^{シビック}生活の問題は二つの面から研究されるべきだと考えています。(1) 研究される各地域における特色、物質的な成長と発展、生命と思考の欠如した要素に注目すること。すなわち建造物、地理的な位置、時代、過去と現在の生活への適応度、そして、ある商業や産業の増加と他の商業や産業の低下とともに進化あるいは退化する特有の地理的特徴についてです。(2) 人種的、教育的、その他の要因

を通しての市民自身の質の変化。つまり全体としてとらえられる諸個人の集合体の中だけではなく、すべての商業や職業の中での変化の展望を説明することによって、どのくらい理想が変わっていくのかを注目することです。われわれは研究のための調査における二つの軸によって、われわれを取り巻く構造 (fabric) を形作る上で、環境——社会的、風土的な環境——や、人種的、個人的な特徴が、どのくらい影響力を持っているのかを決定づけることができるかもしれません。

われわれが手にするこれらの研究の二つの軸で、無意味ではないけれども小さな部分になっている社会生活の活力、成長力、未来の可能性を予想することができるかもしれません。われわれは取り巻くものに対する反応を知ることによって、未来がどのように発展するか判断することができるでしょう。そしてわれわれは、それぞれの国の進歩に対する欲望の強さと、《そのような欲望を喚起させる要因を》知るによって、都市生活^{シビック}において最も優れている部分を刺激するものや、妨げているものを理解できるのです。

アール・バーンズ (Earl Barnes) 教授（感謝の意を示しながら）の発言

私は何年間もゲデス教授に対して意見や提案そして広く生活全般において恩義がありまして、今日の午後に読まれた論文に関する会合で発言することに格別の喜びがあります。アメリカ人である私にとっては、特に有機的統一体としての生命^{ライフ}の発表が聞いたことが興味深いです。しかし人生^{ライフ}とは教育の期間であり、人生^{ライフ}の今この瞬間の後に何もないようでは、すべてが無意味です。フィラデルフィアの 63 番街 1067 番地と、ワシントンの G 通り 1718 番地に住んでいたアメリカ人にとって、自身の実在が重要になる生活が可能かどうかを考えると大いに興味深いです。だから、彼の地理的で地質的で物質的な世界や、過去の出来事を通した人間性の長期間の発達、これらすべてのリアリティが彼にとって本当に重要なのです。

ゲデス教授自身がわれわれに、それが可能だと示してくれました。エディンバラに行って、そこでゲデス教授のもとで実行されている古い生活^{ライフ}の復活を見れば、誰もがそれが実現可能であることを知るのです。今やゲデス教授の名は、すべての市民に対して、都市のあらゆる可能性を示す都市計画と結びついているので、私はわれわれが皆、ゲデス教授が実践的な事柄について話すことを聞きに来たのだと考えています。私は教授の論文に個人的に深く感謝しています。そして皆さんも教授に心からの拍手をお願いします。

議長（チャールズ・ブース氏）の議論を締めくくる発言

私自身は、ロバートソン氏が実践的な結論、つまり実践的な点に言及しているような調査を行うことの極度の難しさについて述べたことに全面的に賛成です。現在、実践的な仕事は最も注目される必要があります。私は歳をとり過ぎているのでおそらくできませんが、そういった仕事に魅力を感じているので、私はロック (Loch) 氏が言うべきことを発言する前に退席したことを申し訳なく思います。私がロンドンについて記述したものがぼんやりとした迷路のようだということは認めます。しかしそれでも都市のような有機的統一体の中で、様々な人々を適切な場所に配置するという明確な仕事をするのなら、私は完全な概念を求めることを考えないではいられないのです。私はこのことを、われわれが完全な概念なしに実行できると考えていません。私は今夕の論文を、われわれが必要としている完全な概念への重要な貢献であるとみなしています。私は労働者や思索家それぞれが都市改良^{シビック}の計画の中での自分の立場を心得ていただきたいと思っています。そしてすべての人間が、自分が試みていることは何なのか、ここで都市学と呼ばれている複合的な生活^{ジョイント ライフ}——都市の生命^{ライフ}や都市における生活^{ライフ}——に対して貢献すべきことは何なのかを心得ることが完全にできると私は考えています。一人の人間がすべてをやることはできません。この社会

学会のような学会の中にあるからこそ、諸個人と諸社会がそれぞれに認められた部分を演じるだろう全体的な計画が可能なのです。それはある都市でなされた仕事を他の都市に適用できるということではありません。〔個々の都市には〕非常に強い個性があります。しかしそれぞれの町はその町自身のために何かをやり遂げているのかもしれませんが。私はロウントリー氏がヨークでやり遂げ、親切にも私に相談してくれた仕事にとっても興味を持ってきました。彼は私とはかなり異なる分野でその仕事に着手しましたが、その共通する部分において共通の基盤を持とうとしました。皆さんの中でホースフォール (Horsfall) 氏のマンチェスターの本をまだ読んでいない方にはそれを読むことをお勧めします。ゲデス教授は産業の頂点を迎えた都市について、地理学的に完結したより大きな地域を単位にしたあざやかな叙述を、われわれに示してくれました。教授がダンディー (Dundee) を特別な例として言及していたことを取り上げます。ダンディーでごく最近始められた調査があり、調査している人たちと連絡を取っているところですが、われわれがあの都市に対して思い描いている絵図の完成に何かを加えてほしいのです。ダンディーにおいて調査者たちは群衆と女性労働者に関する大きな難点を抱えています。私が提案したことは、ダンディーの特別な状況に関する特別な研究を、彼らがすべきだということです。そこでの労働力は袋の製造とジュート生産がほとんどであり、多くの女子労働者がいます。そしてそれは、研究の中で特別なテーマと考えられるものの一つです。

その他に、せわしない町の中心部のごく近くにも残っている自然の美観の保護に関しては、それらが見守られ、保護され保存されることが最も重要であることは確かです。ゲデス教授は、ダンファームリンの^{ブラクティカル}現実的な問題に^{ブラクティカル}実践的な仕事の一部で貢献しました。教授のダンファームリンに関する魅力的な研究「都市の発展 (A Study in City Development)」は、ダンファームリン近郊にどんなに美しい特徴があるのかを示し、研究に

にとってとても興味深い方法——保護や改良に費用がどのくらい必要なのかを示してくれます。この問題での教授の写真の使用は非常な成功を収めました。ゲデス教授は風景の写真に背景と遠景そして不潔な前景とを〔構図に〕収めて、もともと美しかった小川のそばに投げ捨てられた古いスズのポットやあらゆる種類のくずなどの都市のゴミによって荒廃している状況を撮りました。教授は写真版を巧みに使って、自身が望まないものを抜き取り、小さな滝を含む他の特徴を紹介しています。そして皆さんはみすばらしい郊外地区の代わりに格調高い公園の写真を見ているのです。現在それは実践的な仕事なのです。教授が〔論文のB節中にある歴史的発展の〕図の中でクエスチョン・マークによって記した要素、つまり予想の要素はそこにあるのです。皆さんはホースフォール氏の仕事の中でのマンチェスターに関しては考えを同じにしています。彼らはマンチェスターの地図を広げ、町の両側に残る美観を損なわずに町が発展するにはどうしたらよいかを示しました。マンチェスターの近くには、予想が立てられ、配慮がなされるに応じて、完全に破壊されるか、もしくは保護されるかもしれない本当に優美な自然風景があります。これは人々が同意しない理由のある問題ではありません。困難は常に財政上のことだと考えられているのです。地域の現実的な^{マネーバリュー}経済的価値を間違いなく高めてくれる美観を保護する機会を、財政的な計画によって、捨ててしまうのは悲しいことです。私は狭い通りによって計画されるようなやり方で、都市の価値が高まることになるとは思いません。われわれの都市を取り巻く環境は、どのように広げるのかについてわれわれ自身の間で合意しさえすれば、未だ発展していない土地なのです。そして、そうした共同の行動によって全員が利益を得られるでしょう。こうしたことに関して、ドイツについてのホースフォール氏の研究には優れた説明があります。^{ンビック}都市の問題について、ドイツから学ぶことが多くあることを言うておかねばなりません。ある町では地所が縦長になっているのです。それは、〔中世ドイツで、耕地する際に使っ

た鋤が、真っ直ぐに進み転回できなかったため、農地が縦長であったことの名残で〕地所が鋤の走った範囲によって測量されていることの結果です。この方法を町の敷地に適用すると、通りに〔面する幅の問題があって〕不便です。ドイツの町にはこのように荒廃した地域があり、この問題を改善するべく人々は一致団結しています。全ての土地所有者はこれらの望ましくない区画の再整理によって改善され生まれる全体的な利益から、分け前を得ることができます。そして公正な割り当てや分け前などに対するいかなる意見の相違も、公平な調停者に対して問い合わせることができます。他の人よりも少し多く利益を得る人もあるでしょうが、全ての所有者が利益を得ます。この例は、改良に最後まで耐える気持ちのある人が少数だったときに——必要なら改良の実行を強要させることも含めて——われわれの町の経済的価値や社会的価値そして衛生的価値をどうにか向上(improve)させる方法として試みるのが賢明だと言えるものの一例なのです。

(西川 恭子訳)

“Written Communications,” *Sociological Papers 1904* (1905): 130-138.

書簡によるコメント

ボルドウィン・ブラウン (Baldwin Brown) 教授

(エディンバラ大学 美学 (Fine Art) 教授)

私に、友人のゲデス教授が都市の^{ライフ}生命を扱った方法論を採用してきたことへ心から賛意を申し上げる機会が与えられたことを嬉しく思う。ゲデス氏が論じたこととは、近代のコミュニティや、現在だけでなく過去や未来を持った有機的成長物としてのコミュニティの物質的^{シェール}外形だといえる。しかるに、われわれはあまりにもしばしばこうしたより幅広い見識を持った考察を、何かしら目先の重大事にかまけるあまりに見過ごしてしまうもの

である。これに関連していうと、〔ゲデス氏の論文によって〕イギリスの歴史的な町に実地教育の側面が与えられるようになったのである。この町には、それが作られたときに建設された古代都市の城壁と堀の一部が残存しており、現在のところこれらがイギリスで最も重要なもののなのである。しかしながら一年前に市会は、新しく建てる小学校のための用地とする目的から、この壁の一部を壊し、堀を埋め立てた。その学校では間違いなく「委員会によって検定済みの」本によってスコットランドの自治都市の過ぎ去った歴史を教えることになるであろう。しかし当の歴史の生き証人は、真っ先に消去されねばならなかったのだ。この古代の歴史的な城壁の残る部分も、ただその用地が労働者住宅に都合よいということを口実として、つい数週間前には完全に破壊される運命にあったのだ。町のモニュメントが守られるようになったとはいえ、この国全体ではそういうことがなされているのである。

この立派な町で皆が選出した役人や首長は、〔町の歴史的遺物の保護などの〕彼らに託された重要な利益について、全くといっていいほど気にとめようとししないのだ。そこで、ゲデス教授が首尾よく進めてきたような、より広い視点を持つことを彼らに教え込むことが何より求められる。

ゲデス氏は自ら設定した方針に則って、エディンバラにおいて実践的な仕事をしてきた。そして私は、最近ゲデス氏やその同調者たちが、われわれの古い建築物をより賢明なかたちで守ってゆくことこそ都市に利益をもたらすのだと述べてきたことに、関心を呼び覚まされることとなった。

エディンバラでは、都市の過去の^{ライフ}歴史が刻まれた古い^{モニュメント}建築物は堅固であり、それらを取り壊すには多くの困難を伴うという強みを持つ。それゆえ、都市の^{シビック}発展によって、われわれがここに実地教育の場を保存しようとする動きが、いつの日にかこの国全体の関心事となるだろう。

ウォルター・クレイン (Walter Crane) 氏

(美術工芸博物館協会 (Arts and Crafts Exhibition Society) 会長)

ゲデス教授による非常に興味深い〔研究である〕「都市の発展 (Study in City Development)」は、きわめて示唆的であり、思想に富み、趣きあるその論じ方がこうした問題を扱う際にどれほど大きな違いを生み出すのかということを示している。浪費されてきた機会や驚くべき無知さ、そしてしばしば交通路の整備にかこつけてなされる非常に性急な撤去が、明らかに都市改良についての唯一の動機であることは悲しむべきことである。可能な限り歴史的建築物を保全し、街路に植樹し庭園を配置することや、新たな建築物のために見た目に均整の取れた外観とオープンスペースを際立たせておくことは、雑然としたレンガ・モルタル造りをいくらか人間味があり住み心地のよいものとする第一歩となるであろう。

土地所有者たちのすばらしい公共心 (public spirit) が好意的な状況の下で、どれほど多くのことをなそうとも、こうしたあり方の可能性は、土地の個人主義的な所有制度と地価制度が絶対のものとして許容される限り、非常に疑わしいと思われる。経済制度の大きな変化なくして、大きな社会改良を目にすることは望みえない。しかし、都市の美観を改良せしめんとするあらゆる努力は、実際には、コミュニティの福利を熱心に考えている人々に歓迎されるだろう。ゲデス氏がなそうとするものは、社会的に重要な事を実現しようとするすべての人々の強い関心と、熱心な考慮を呼び起こすことであろう。

J. H. ハーレー (Harley) 氏 (文学修士)

社会学が仮に、技芸としてその正当性を証明したいならば、現在を説明し分析しなければならないであろうし、少なくとも、ある一定範囲までの未来の予想図を提示しなければならないであろう。社会学はすべての都市生活の錯綜した迷宮を通じて、その研究の方法を手探りで進め、その

上でわれわれがどこにたどり着き、これからどのような方向に進もうとしているのかを示すものでなくてはならない。しかしゲデス教授は、「現時点では、実践家が、現在の自らの考え方や行動が過去の産物であると意識していないことが認められ、そして都市において自然条件を把握した範囲内で働いていることが認められるならば、それで十分である」と述べた〔E節〕。この点はゲデス教授がもっとも曖昧にして、不満を抱かせた応用社会学の一部分である。われわれはいまや現在が過去の産物であり、多少なりとも現在とは時間的に隔たりのある先行研究から現在に目を向けることで、初めて現在を十分に理解できるのだということを認めなければならない。しかし、ゲデス教授が明らかにしていないのは、シティー (the City)〔ロンドンの中心に位置する金融街〕が、近代的な意味における〈ひとつの都市 (a City)〉となったのは、現在あるいは近い過去なのだということである。〈都市 City〉としてのシティーは産業革命の産物である。巨大で偶発的な^{ヒューマンライフ}人間生活の寄せ集め、超過密状態、貧困線、イーストエンドとウエストエンド、乳児死亡率、特定の地区に集中した商業、^{エイリアン}異邦人、犯罪と悪徳——これらすべての社会病理的問題は、近代産業の諸条件が、環境が適切に進化する時間もそういった環境に人々が適応する時間も与えずに、共通の利益をほとんど持たない人々や、ある限定された区域内の秩序の中へと配置されることを強いられた人々を、集めているという事実から生じている。それゆえ、過去のロンドン^{プライマリー}は現在のロンドンという謎を解くための十分な助けとはならない。なぜなら過去のロンドンは、こうした社会的成長を引き出さなかったし、現在のロンドンの内側へと近づくことをわれわれに時として断念させるような社会的寄生虫に成熟した土壌を提供することもなかったからである。

事実、ゲデス教授は社会学を^{プライマリー}第一段階の科学とするにはあまりにも価値のあるものであり、^{セカンダリー}第二段階の科学とするにはあまりにも物足りないものだと考えているようである。ゲデス教授は、われわれの現実的な実践や将

来の予算に対してこの包括的な科学が与えるであろう影響力を測定したと言い得る前に、社会学的推論もしくは社会哲学を必要とするときにおいて、応用社会学を社会調査の社会科学への応用と定義している。ゲデス教授が述べるように、「観察は、解釈を排除することとは全く異なり、それ〔解釈〕のために用意された手段にはかならない」のである〔B節〕。しかし、こうした用意は社会学という完結した百科事典的な科学を作り上げるさまざまな専門分野から形成されねばならない。私には、社会学の教育として「地理学的であり同時に歴史学的でもある地域調査以上に」よい方法がないと述べることは〔B節〕、妥当性もなく社会学の視野と重要性を狭めることのように思われる。たしかに「地域調査」は完結した科学としての社会学にとって、最も具体的で簡潔な部分においては適切な方法である。そしてわれわれが歴史の専門家になるときでさえ、この地域調査を越えなければならないのである。古い修道院の廃墟での夏季講座において歴史の「調査をする」ことは非常に興味深いことではある。しかしながら、修道士たちが過ぎし日々にそこで何をしていたのかという記録を残していなければ、われわれは単なる見かけの上の調査によって、ゲデス教授がもたらした歴史全体の領域によって作り上げられた非常に総括的な地図以上のものを得ることはないであろう。言葉を換えれば、歴史とはいかなる専門的な意味においても、ゲデス教授の述べる「調査」以上のことを要求するのだ。それ〔歴史〕は、言語学、批評、考古学、法制学、政治学の援用を必要とする。つまり、「調査」と同様に比較や批評がなければならないのだ。歴史は社会学者に社会的実験の結果を見せる実験室なのであり、そしてまた歴史は社会学者にとって物理学者にとっての実験、あるいは生物学者にとっての比較研究法にあたるものなのである。

このように、「応用社会学」としての「都市学」の視野は計り知れないほど広がっている。現在は過去の産物である。しかしわれわれは、在りし日のロンドンにおいてハンザ同盟の商人たちの居住地のような古代の集団

が発生学的な意味での生命の最も重要な意味を示していることを、現在という視座から知っている。近代都市は、社会学という完結した科学に内包されている多くの専門家の知識を必要とするような社会学的問題に満たされている。そしてそれら〔社会学的問題〕のほとんどによって将来の見取り図が提示される。われわれはブース、ロウントリーの両氏によって示されたように、自分たちの研究のあらゆるところで爆発の前兆のような貧困線を考えている。そしてわれわれは、アーサー・バウアー (Arthur Bauer) 氏が社会生活に関する一般的な特性について最新の極めて示唆に富む分析に与えた特徴あるタイトル、『社会階級 (Les Classes Sociales)』が正しいものなのかどうかを最終的には自問自答するに至ったのである。

T. C. ホースフォール (Horsfall) 氏

(マンチェスター市民組合 (Manchester Citizens' Association) 等の代表)

論文の教えは、私にとって最も信頼に値し、手助けとなるもののようと思われる。私が近い将来のことと信じている未来の町は、学校、博物館や美術館、遊び場や公園そして運動場、湯治場、植樹された幅広い街路がある。そして町を取り巻く手付かずの田園地帯によって、住民すべてを、あらゆる地域とあらゆる文明の段階における《最良の》影響の下に一定程度まで収めねばならない。その影響は、最良のものでなくとも、われわれの町を今のように形成することに貢献している、そして貢献してきた影響なのである。

H. オスマン・ニューランド (Osman Newland) 氏

^{シティズンシップ}
(『市民権シティズンシップの小史 (A Short History of Citizenship)』著者)

過去の民主的な政府の誤りは、発言する大衆に知性と自己意識が欠如していたことだと考えられている。道徳性のような市民権シティズンシップは、本能のまま

成長することが許されてきた。というのも、市^{シティズンシップ}民^{シップ}権がこれまで一つの科学として体系化されたことはなかったし、あるいは技芸として応用されることもなかったからである。スパルタとアテネにおける都市学のシステム (a system of civics) は、ゲデス教授が詳細に説明したものに比べて精巧ではなかった。しかし、スパルタでの市^{シティズンシップ}民^{シップ}権はナショナリズム (Nationalism) と不可分なものになっており、アテネでの市^{シティズンシップ}民^{シップ}権は自治主義 (Municipalism) を無視できなかった。近代においては、市^{シビック}民^{シップ}教育が同様の困難に直面している。アメリカでは、国旗に敬礼することが若い市民にとっての第一の義務であるし〔ナショナリズム〕、ロンドンでは、地方自治が国^{カントリー}民^{シップ}や時代そして世界に関する部分を担ってきたという地方^{ローカル}の歴史から、「都市学」は益を受けている。諸個人と利益団体についての応用社会学としての〈都市学〉は、夢見られるものとして始まった。そして都市学が適切な発展を遂げるためには、現在において、一般大衆が「都市」という理念の歴史的展開と、個人に関する心理学から区別されるものとしての集合体の心理学との両方を越えるものを知っていることは、仮に必要ではないにしても、望ましい。「ごくありふれた人」を政治的自動機械ではなく、自覚ある市民にできたときに初めて、「都市学」への共感を得ることができるだろう。そのような共感なしには、社会学者の言う「都市学」は部分的で不正確なものになってしまうのである。

G. ビセット・スミス (Bisset Smith) 氏

(政府調査官 (H. M. Registration Examiner), 東部スコットランド担当)

この論文には諸所にとらえどころのない曖昧さが見られる。それはゲデス教授が高尚な夢を持つ夢想家であるだけでなく、実行家であり、実践的な教導者であるからで、私はそれを確認できたように思う。ゲデス教授は言葉だけでなく、技芸や建築そして教育機関において、自身を表現してき

ており、多くの方法によって、時には間接的に、学者の活動や都市的^{シビック}活動に影響を与えてきた。

〈展望塔 (Outlook Tower)〉からゲデス教授が理想のエディンバラのことを思い描いているならば、「何をしているのですか？」とからかう人に対して、ただ次のように答えるだけであろう。「辺りを見てみなさい！」。そこには彼が始めたセツルメントがあり、その建物は美しく、明るく、そして心地よい。そして塔それ自体も彼の考えが具現化されたものであり、石と空間でできた百科事典だといえる。

われわれはこの論文を批評するにあたって、その原理の具体化に向かっているこれらの試みを考慮せねばならないであろう。この学会で読まれた最近の論文において、社会学的進化論者は「何よりも起源に興味を持つが、究極的には理想に興味を持つ」ものだと言われていたことを思い起こすだろう。その論文では、「理想としてのより大きな一般化という公式化を通じて、社会学は理論から実践へと戻ってゆく必要が望まれるであろう」と主張されていた。かりに都市学が応用社会学であるならば、われわれはこうした規準に依拠せねばならない。そこで、われわれが問わねばならないのは次のことである。(1) 当該論文における一般化とは何か、(2) どれだけのことが証明可能な社会学的証拠によって正当化されているのか、そして(3) 〔一般化したものが〕感情によって行動の理想へと変容するときに、それらが生み出す結果とは何か。これらに適切な回答を試みることは、おそらくここでの議論の限界を越えてしまうことであろう。しかし、前提に関するこうした問題点を挙げることで、議論は明らかなものとなってゆくはずである。人口統計学を生業としている者として、細部に関して述べれば、「都市学」において、「人々の現況についての合理的に設計された^{センサス}人口調査」へ手短にしか言及されていないのは残念である。

しかしながら、『性の進化 (The Evolution of Sex)』〔ゲデスとトムソン (J. Arthur Thomson) との共著で 1889 年刊〕の結論部分を研究した

者であれば、ゲデス教授が《人口》に関する問題を見逃したと非難できない。そして、「チャールズ・ブース氏は、最新かつ最高の経済学者の一人である」という十年前に書かれたゲデス教授の賛辞は、『経済学とシティズンシップの教育』の読者にはよく知られている。大いに示唆的なその論文で、ゲデス教授は一歩進み、人口は考察の中で主要な位置を占めねばならないとしたうえで、「地域ごとの職業特性の研究は、文明全体に関する研究に不可欠な資料である」と指摘している。

ブランフォード (Branford) 氏による「過去、現在、未来における人間の営みのあらゆる形態」という職業の定義を受け容れるならば、「都市学」の概観的な調査体系では職業が、エディンバラやグラスゴー、ダンディーといった都市の進化を記述し、説明し、予見するにあたって重要な位置を占めねばならないと考えられる。

『ロンドンにおける人々の生活と労働 (Life and Labour of the People in London)』は、人口の統計的状況——私はこの公的仕事から地域調査の機会を与えられている——からスコットランドの都市にも、ほぼ等しく応用可能ないくつかの総合的な観察を内包しているものでもある。

ブース氏は、その社会学への偉大なる貢献の結論部分で以下のように述べている。

「多くの影響が、貧困層にはその欠乏状態にほぼ比例して〔貧困を〕増やす原因となり、逆の方向から暮らし向きのよい人々には、その富にほぼ比例して作用している。しかし死亡率を考慮に入れると、この法則は維持できなくなる。」

過密した居住環境における悪条件下での貧しい生活によって、〔貧困層の〕正味の増加はなくなった。優生学による改良という望みをもつ人々にとって、次のことは望ましいであろう。ブース氏は、『社会の進化 (Social Evolution)』がよく知られている〔ベンジャミン・〕キッド (Kidd) 氏とは異なり、その結論において楽観的なのである。「健康の標準レベルが向

上することが期待できるということの全体において、われわれは死亡率と同様に出生率も低下すると言えるだろう。そしてそれゆえに、より良好な衛生状態の結果として、最下層の人々が大半を占める大規模な人口の自然増加を恐れる理由は何もない。」このような都市の遺産は、量的なだけでなく、質的にも増してゆくのである。

W. I. トマス (Thomas) 教授 (アメリカ・シカゴ大学教授)

ゲデス教授による計画を、アメリカのような新しい国に応用可能かどうかという点からみれば、不十分であると考えている。というのも、これらの条件に基づいた新しい国の都市は、時代の経過などによってではなく、急速かつ同時代的な人口の移動によって形成されているのであって、それを認識し損ねているからだ。最初の白人永住者がシカゴに来たのは、ちょうど 100 年前のことであり、この都市は目下 225 万人の人口を抱えている。ここで問題となるのは緩慢な歴史的展開ではなく、地球のあらゆる場所から人々がある特定の場所に向かって急速に移動することであり、それゆえに歴史的な視点よりも民族学的な視点がより重要なのである。

ゲデス教授による回答

私の論考について、大半の方々と本質的な部分で一致した範囲において、自分自身の考えを述べさせてもらえることを心から喜ぶたい。だが、批評者諸氏に認識していただきたいのは次のようなことである。まず、科学に関する問題——過去の状態についての地理学的で歴史的な調査、そして対応する現在についての^{センサス}人口調査としての都市学の概略——は、私の主題の前半部分であり、それらは効果的な社会事業である技芸としての都市学に必要とされている不可欠な基礎を与えるものに過ぎないのだということである。

実際にこの点からさまざまな批評者が、私の論文の社会事業としての都

市学の未来には大きな期待を寄せている。それゆえ、総合的な視点にたってみれば、単なる科学的なイントロダクションとしてではなく、主題の包括的な輪郭を描くために前述〔科学としての都市学〕の部分が使われたのであれば、批評者と書き手とが大きくかけ離れてはいない。

この論文にとって厳密に応用可能な批評があったのかといえ、実際にはほとんどないと言っていいだろう。私の論文も議長〔チャールズ・ブース〕の仕事を引きことから始めているように(A節)、私はロンドンそれ自体について記述されたその卓越した仕事によって——あまりにも控えめにしか〔私の論考には〕適用していないが——彼が第一人者であると確信している。なぜなら彼の報告書は、ロンドンという迷宮に対する効果的な手がかりをわれわれに提供し、その徹底的で専門化された地域調査の手法は、これまでロンドンに向けられた中で最も徹底した輝かしい探求だからである。

しかしながら、近代パリの都市計画が森の中の馬車道に由来するといったことなどへの具体的な批判では、批評者は単にどこかフランスの森を歩くとか、シャンティイ(Chantilly)やフォンテヌブロー(Fontainebleau)から、もっと小規模なものまで、歴史的住居やその周辺についてベデカー旅行案内書など地図を備えたガイドブックを参照する必要がある。それは、森の中の馬車道が、始めは楽しみとか、狩りの安全と成功のために工夫され、その後、統治と防衛のために使われるようになり、さらには城を豪華なものに建て直すに際して最もよい遠景となるものとして価値を認められるようになったことを知るためである。それゆえに、後の世紀に至って、ナポレオン三世とオスマンの計画が彼らによってパリにもたらされたのではなく、よく知られた前世紀の造園術——そこには建造物としての都市の発展について、後世にそれが決定したように言われているいかなる考えもない——の直接的な模倣であり、それがかつて狩りをする貴族のための広々とした森の馬車道からシンプルに発展したものだということ

は、空想的な仮説ではなく明白で不可避的な帰結なのである。

近年のワシントン市^{シティズン}民は次のことを忘れてしまっている。彼らの町の日もくらまばかりの遠景は、首都としての目的を表現しようとして〔初代大統領〕ワシントンが招聘したフランス人の造園家（〔ピエール・〕ランファン少佐）によるものなのである。新世界における、この素晴らしい都市計画が旧大陸の森の馬車道に由来することは、その重要な大建築物がルネサンスや伝統的な原型を持つことと同様に、明らかである。

〔▲〕私は自然的発展という観点から、あらゆるすべての都市計画についての研究を、ことさらをお願いしたい。このような地誌的な歴史は——すでに地理学者や歴史学者がよく知り明確に説明していることだが——、ロンドンのような大都市の住民についての純粋なまでに抽象的で主観的な社会学が、近代都市でさえ〈自然〉という生命^{ライフ}のもっとも複雑な進化論的表現物であり発展であると、自然研究者^{ナチュラリスト}とともに知るための手助けとなるだろう。

〔▲〕私が取り上げたこの見方はフランスではありふれたものである。しかし私は、イギリスの読者たちにはほとんど知られていないことを、この島国に原生的な森がほとんど存在しないという事実から説明しよう。わが国の貴族たちは、森ではなく耕された牧草地帯か耕作可能な地方に住み、木を植えていた。「植^{プランテーション}林地」であったが、林はほとんどなく、森は皆無だった。このことはさらに次のような事実を明らかにする。われわれの都市^{アーバン}的な協働形態もそうなのだが、フランスの貴族たちは、われわれ以上にハンターの社会編成と社会的伝統に属している。一方で、わが国の貴族は、スポーツを愛好しているが、基本的には地方の名士なのである。つまり、実質的かつ歴史的に所領の村の農民に近いのである。このようにすべての発生は、それぞれの歴史によることが明らかなのである。これには、自然に近いといわれるイギリス流の造園術と、より整然としたフランスのものとの間にある歴然とした違いの起源もある。まさに実際の感覚と

して、前者〔イギリス流〕は後者〔フランス流〕よりも大いに不自然なものだとわかる。

〔▲〕 ロンドンとパリの都市計画を対照させて見るこのような方法を認めたイギリスの市民でも、ここに含まれている原理を理解しない限り、なぜロンドンとパリの住居がここまで大きく異なるのかということはわからないかもしれない。〔ロンドンでは〕敷地が分かれていて、各戸が独立している。家のドアは無防備で、通りに面して開かれた状態である。その一方で、普通のパリジャンたちの家は込み合っていて、高層のアパートが中庭を取り囲んでいる。そして高い表の玄関は堅牢な樫で作られた扉で閉ざされ、常に警戒を怠らず、しばしばぶっくらぼうでいる^{コンシェルジュ}管理人が守衛をしているのである。

〔▲〕 前者〔ロンドン〕が無防備で広がりを持つ村に、それぞれの家族が分けへだって住まうような、農村で長い期間にわたって住むための建物であり、もう一方〔パリ〕が城壁の中の混み合った大陸式の要塞都市であるということに、歴史が十分に反映されているのである。

〔▲〕 しかし、こうしたことに加えてわれわれは、農家の防御用の庭としてフランス式の中庭を持つ家の起源を、歴史的にさかのぼり、地理的により簡明に考えなくてはならない。そこ〔農家の庭〕の十分な土地は、野生の獣や、そうでなければ野蛮な人々から夜間に家畜を守るため必要とされたものなのである。^{コンシェルジュ}管理人は古めかしい玄関の番人であるだけでなく、獣や野蛮人に対する原始的な門衛なのである。

〔▲〕 私がこのような点〔の説明〕に骨を折ることは、科学的調査は地理的で歴史的な起源の探求を含むという重要な命題を主張し明らかにする目的において、過度のことだと思われるかもしれない。しかし、未だ書かれていない社会事業への持続的な貢献にとって必要な、理想的そして批判的な予見についての章の主要な命題は、過去における進化の道筋を想像し続けることで用意できるのである。

個人的なことを言えば、余暇や生活実践の大部分を古い建築物の研究と保存に費やしている人間としては、それは歴史的な過去に対する好古趣味的な関心からなのではなく、ある実践的な関心によるのである。それは教育的で進化論的なもので、経済的ではなく観念的な功利主義者が持つ関心で、エディンバラ旧市街やダンファームリン旧市街のような古い都市における現在の非衛生的な失敗状況の改善に対する関心である。それゆえ、都市の過去において記録された偉大さを越えるのでなければ、それを未来に実現するために、工業や商業の欠点を克服することはできない。

そのようなことから、私がここまで〈応用社会科学としての都市学〉について主張してきたことは、地理的で歴史的な事実についての進化科学の広範な基礎を築かねばならないということであり、ユートピア主義者の希望として嘲笑されやすいであろうが、〈応用社会^{アート}技法としての都市学〉を築かねばならないということなのである。

(新井智浩訳)

“Press Comments,” *Sociological Papers 1904* (1905): 139–144.

新聞評

『ザ・タイムズ』紙(1904年7月20日)冒頭の記事にて

月曜日に開催された社会学会(the Sociological Society)にて、ゲデス教授が報告しわれわれがその概略を活字化した原稿には、野心的な自治体(municipalities)に推薦されるべき実践的な価値を持つ考えが含まれている。今日は都市の時代であり、世界すべては都市的建造物(city-building)だといえよう。どこであれ、人の流れは地方から町へ向かっている。中国やインドの大部分はいまだに村かもしれない。しかし、ロシアを除く西側では、都市の住人がますます増加している。薄暗い道の途上で多くの人々は次のことを理解している。技^{アート}芸や技^{スキル}術や先見の明が、これまでやり遂げ

る機会に恵まれてこなかったものを一つ一つ確認すべき時が来たこと、
市政行動^{シビック}についてのより体系だった概念が必要であること、都市建設の真の技芸があり、それを修得し実行することがこの時代に必要であることである。ゲデス教授は確かに、土地はすでにこの問題についての準備が整っており、都市建設の具体的な技芸の始まりは様々な場所で見ることができると述べた。しかし、都市の支配者たちはこれらの考慮すべき事柄に最も盲目的な人たちであり、この点で一貫して十分にこの義務に気づいている自治体はおそらくどこにもないだろう。ロンドンは問題にならないままだろう。厳密な意味での都市と言うよりむしろいまだに地方であるところは、政治学の初期修得者の視点からすると、真の都市に必要なものが欠けている。それは莫大な浮動人口によって、簡単にわかるとされてきたものだが、それを有機的統一体として扱うことができるようになるまでにまだ時間はかかるだろう。しかしマンチェスターやニューカッスルやヨークのようなコミュニティの支配者は、それらはレンガや漆喰がなく、課税すべき地域でなく、偶然に一緒に連れられてきた人の集合でもないことをもっと前に認識するべきであった。そうした都市すべてにはその起源や発展を決定する特有の地域の環境がある。また、それら〔の都市〕には、一般に注意深く敬虔な調査者によって豊富に見つけられ保存されるべき遺跡という豊かな過去があり、すべての住人に多かれ少なかれ知られるべき過去、そして現在をより面白くさせる知識がある。古い建物が消えたときでさえ、昔の道路、小道、通りを辿ることができる。なぜなら多くの歴史は地名の中に生き続けているからだ。そして、熟練者は自然の特徴から過去の時代における町の景観や状態を明らかにできる。ゲデス教授は広範に発展し続ける都市の著述がいつの日かでき上がるという展望を示した。もし彼が予示する包括的なモノグラフを書かなくても、次のようなことを予期するのは確かに現実的なことであろう。普遍的な教育によって町の住人は、先祖の家族の一人が先祖代々の家と土地を見ているという感覚

を学び、学識のない住人でも彼の前任者の考えと古代のコミュニティの会員であることの誇りを身につけるだろう。もし彼がデ・ビアー (De Vere), デ・ブーン (De Bohun), ハワード (Howard), モウブレイ (Mowbray), キャベンディッシュ (Cavendish) のような財産を持っていないとしても、おそらくこれらの家族のうちいくつかは知られていない頃に繁栄した町の市民になっていただろう。

講師が好んで述べているように、そのような誇りあるいは、「市民の意識^{シビック}や良心の成長、つまり都市再生^{シビックルネサンス}に向かう市民意識^{シティズンシップ}の目覚め」〔F 節〕は、未来の価値ある都市にとって最高の保^{セキリティ}障となるであろう。……

ゲデス教授は来るべき都市^{シビック}の未来を垣間見せた。つまり、氏の言うところの「都市の漠然とした長い歴史^{ライフ}と、それに伴って必要とされた先見と政治的手腕を巻き込んだ、より深遠で、より高度な問題」ということであり、真の都市^{シビック}の誇りや先見や合理的理想への絶え間ない追求さえあれば、近い将来に〔都市の未来が〕認識できるかもしれない可能性を示唆した。……われわれの都市が、いくつかの世代にわたって彼らの財産のように先祖によって示された誇りや敬意という同じ精神がすべての市政の変化と発展を支配するときに、どのようになるか調べなければならない。……ラスキン (Ruskin) はどこかで、不健康で汚く危険だったにもかかわらず中世の都市への愛着を示した。彼は、次のことを同時代の人々に教えなかった。もし人々はそれが何だったのかを知っていて、着実にそれを良くしようと努力したのならば、またすべての大きなコミュニティに愛国心と政治形態があったのならば、その愛情が多く理由とともに近代的都市に付随したかもしれないのである。

『ポジティブストレビュー』紙 (1904 年 9 月) におけるブリッジズ (J. M. Bridges) 博士の記事

「都市学：応用社会学としての試み」という題名のもと、ゲデス教授は

7月18日の社会学会にて大変興味深い論文を発表した。その主題の重要性には誰も異議を唱えないだろう。この主題を扱うのに採用された方法は、数多ある中で独創的なものなので注目を集めている。……

求められているものはまず取り扱われるべき事実の調査、つまり地域調査である。この視点は、次に「市政行動のさらに広範な体系だった把握を目指す」のではなく、^{シビック}実際の都市生活によって得られた^{ブラクティカルシビックライフ}実践的な経験^{ブラクティカル}に対応するものと相互に関連しなければならない。……コントに教えを受けたものであれば、広く知られている次の格言を忘れることはないだろう。《予見するために、できるようになるために、知りなさい》。

調査の領域はどこになるのだろうか？ ゲデス教授は都市そのもの (the City) が「総合的に研究される場」として取り上げられるだろうと考えている。もしそうなら、近代的な町かどうか、古代アテネや中世フィレンツェに疑う余地なく適応するような意味において、何が統合として扱われるのか、ということは問われるだろう。しかし著者〔の議論〕を中断するには早すぎる。……講演を聞いたすべての人は、彼が研究の一環として撮った河川システム——高い山岳地帯、山腹の田園生活、溪谷の村落、谷が合流するところの市場、州の主要都市 (county town) に至る大きな谷の集合、川が海へ流れ込むところの大都市 (the great city) ——の写真に魅了されたに違いない。講演は次に都市の分類を規定する法則を調べるために、世界の主要な流域の体系的な研究を主張する。すべての人は、多くの教えはそのような調査から引き出され、二つの危険は回避されるだろうということに賛成する。一つは社会的有機体における環境の影響を誇張することである。例えば稲作によって中国文明を説明しようとするときなどに、ル・プレー (Le Play) 学派が時々陥る誤りである。もう一つの危険は、より注意が必要で避けるべきものだが、すべての普遍化を不可能にするような（時々おそらくそうするように意図されている）たくさんの不適切な詳細の蓄積である。識者達はずいぶん記憶の蓄積を科学の進歩に対する

主な障害の一つとみなし始めた。「さらなる証拠を」という口実によって、ただ単に《無期限 (sine die)》なのではなく、《永久に (sine spe diei)》結論は延期される。しかし、人が人である限り、最終的であろうとなかろうと結論を持つだろうし、持つべきである。

われわれは都市の自然地理学からその歴史へと移行する。……われわれがみな知っているとおりの、彼の主題のこの部分においては、多くの先駆者と後継者がいる。『歴史的な町 (Historic Towns)』と題された、フリーマン (Freeman) 教授による注目すべきシリーズは最も多くの人に知られている。その町の研究はグリーン (Green) 氏の歴史上の労働者の生命と魂であった。世界の大都市の雄弁で力強い写真は、ハリソン (Harrison) 氏の有名な著書である『歴史の意味 (The Meaning of History)』の主要な部分を占めている。大学の歴史学部の学生（希望かもしれないが、そのうちの何人かはいまだに残っている）は、それらがとても刺激的で有益なものであることを知っている。ゲデス教授の手法が特記されるのは、おそらく彼の好みのためだろうが、より大きな都市に限定せず、より小さい都市を扱い、それらの物質的な環境を扱っていることである。とりわけ、彼はただ接近して徹底的に観察するだけではなく、彼の観察の結果として一般化する。生物学において、ある単一の有機体の研究は詳細で正確であっても、構造や機能の法則（すなわち普遍的な事実）を明らかにすることはできない。例えば、血液循環をつかさどる法則を明白にすることに先立って、心臓の多くの形を調べなければならない。実に都市の形態は数え切れない。われわれの観察対象を前世紀に発展した都市に限定しても、それらは無数にある。それらの違いや類似は、中世やギリシャ・ローマ風の都市と対比して、近代都市がどれほど、有用に「統合」として扱えるかを明らかにし、疑う余地なく分析に報いるだろう。これはここでは触れることのできない、国家の、連合国家の、ひいては〈人類〉の大きな問題を浮き上がらせている。

ところで、教師としての見解を述べるならば、教育を商業資産以上のものとみなすことについて全く異存はない。古い町とそれを取り巻く近隣の人々とを併せて眺めることは有用なものである。つまり、完璧なまでに出来上がっているところもあれば、ところ変われば悲しむべきことに汚染されたりはしているが、民族の歴史が濃縮されている記録として教育をみなすのである。歴史的な記憶はわれわれの町に、考えられているよりも広く生き残っている。ニューフォレストで〔狩猟中に矢に当たって亡くなった〕ルーファス (Rufus)〔ウィリアム二世〕の遺体を発見した男の子孫はいまだにそこの近くに住んでいる。ステファン・モーレム (Stephen Mowlem) はウィリアム一世 (the first William) にコーフェ塔 (Corfe Castle) の建設を命じられ、いまだにドーセットシャー (Dorsetshire) のモーレムの会社はロンドンの土手道を舗装している。旅行者やガイドブックに触れられないような遠い村の貧しい女性が私にセージモア (Sedgemoor) に占領されたモンマス (Monmouth) にあったアッシュ〔モクセイ科の木〕を見せた。本の知識がないに等しいサフォーク州 (Suffolk) の小作人は、300年前フラムリングム (Framlingham) への途中にプロテストントの亡霊が通ったという「ブラッディ・メアリーの小道 (Bloody Mary's lane)」を指し示した。カーライル (Carlyle) の『過去と現在』において不滅になり、いまだにイングランド東部の驚嘆である大修道院は現在、ジョセリーン (Jocelyn) がわれわれに伝えたのと同じ村に囲まれている。聖アルバヌス (St. Alban) にちなんで名づけられた町、カシバラム (Cassivellaun) とシーザー (Caesar) の記憶、ディオクレティアヌスの迫害、かつて歴史的調査の学校になった修道院の創始者である偉大なオッフア王 (King Offa) の記憶、そしてわれわれの中世建築術の典型、これらすべては、全体の最後を飾る『ノヴム・オルガヌム (Novum Organum)』の著者〔フランシス・ベーコン〕の記念碑とともに、16世紀の歴史を要約する。

ゲデス教授は 20 年以上、「現場で」と地質学者が言うような、野外で社会学を教えるこの方法を採用してきた。……

これは研究や、建物と歴史的興味のある場所の記述以上のものである。彼の目的の一つ目は物質的環境を考えながら都市の成長を研究すること、二つ目は博物学者が種における個体や属における種を比較するように、比較することにより、都市の発展を規定する法則を見つけ、市政行動を直接助けることである。

このことはゲデス教授がカーネギー・ダンファームリン財団のために書くように依頼された報告書で、十分に述べられている。その（印刷されたが、出版されていない）報告書の目的は 25,000 ポンドにもものぼる財団の歳入はこの古代的で歴史的な町の利益のために使われるべきであると提案することであった。現実と理想、仕事場、公園、文化的建造物——それはそれぞれ物質的で、芸術的で、歴史的なものである——など多くの写真を使った計画は、ユートピア主義者のようにその多くを拒否する人たちですら深い興味を持つものだろう。しかしそれは少なくとも与えられた場所と時間とを特別に適合したユートピアである。それは景観と歴史のそれぞれの特徴が作り出すものであり、機が熟したときにより発展できる余地を残している。そのうえ、それはすべての範囲から最も高度な真実を持ってくるという共和主義者の理想に貫かれている。

コントは彼の『実証哲学講義 (General View of Positivism)』の第 5 章などにおいて、社会を刷新する確かな原理は、それらが可視的で明瞭にならない限り、発表するのに不十分であると指摘している。彼は次のように述べている。「^{アート}技芸の主な機能は〈科学〉によって供給された基礎の上に型を作ることであろう。……完全に社会を刷新する重要な原理は学者によって苦心して作り上げられたかもしれないが、それらはまだ実践的な結果のために十分に明確に限定されたものではないだろう。……しかし、〈哲学〉の段階ではまだ余地があり、〈^{アート}技芸〉の段階では実践的な行動に介

入し刺激する。……それゆえ、将来的にはユートピアの体系的な構成は一般的なものになり、明確な認識においては、理想が現実に従属することになるだろう。」

さて、『ダンファームリン報告書』は社会事業のために科学と^{アート}が結び付いた見事な例である。それは厳密に地域の特色と状態に即したひとつの理想像だといえる。つまり、現代そして未来の市民にとっての非常に高度な^{トレーニング}教 育の形態を供給するなかで、古の都市の持つ生き生きとした力を現代とそして未来の都市に引き伸ばしている。その^{トレーニング}教 育とは知性だけでなく、感性や、手先の器用さや、想像力に関するものや共和主義的なものである。また、その^{トレーニング}教 育は「途絶えた言語についてのなかなか習得しえない、なじみの薄さ」に触れている少数の人々をカーストや軍国主義の考え方に導き、その途絶えた言語は人間の進化についての包括的な研究に道譲り、社会事業のための新しい時代の準備を単に部分だけでなく全体に行き渡っているものなのだ。

このようなユートピアは理論と実践との中間に立ち、思索に触発され、行動を刺激するため、^{アート}〈^{アート}技芸〉の本当の社会的機能を果たすとみなされるだろう。社会学者 (the social artist) だけは、単なる装飾者に墮落しないように、彼の考えが単に真実であるだけでなく、適切であることに注意せねばならない。ブース氏のロンドン〔調査〕やロウントリー氏のヨーク〔調査〕のような「地域調査」にはなんと遠いことだろうか。私は、ゲデス教授が望んでいるところに到達していないことを懸念している。われわれの近代的な^{ライフ}生活における都市は、より大きな全体である国民 (the nation) と切り離せない機関〔器官〕である。都市の^{ライフ}生活が大きく変化する前に、われわれは自問しなければならない。^{ナショナルライフ}国民的な生活とは何か？ その倫理的で宗教的な基準は何か？ 富の獲得や分配の習慣とは何か？ そして外交はどうするべきか？ それは戦争か平和か？

カーネギー氏は人口3万人の町のために50万ポンドを寄付した。その

寄付は壮大ではあったが、ゲデス教授の計画を十全に実行するには多すぎるものではなく、十分でもない。しかし賢明に使われたのならば、それは素晴らしい結果を成し遂げるだろう。われわれが南アフリカの二つの自由な州を抑圧する仕事〔ブーア戦争〕に近年つき込んできたものは、ダンファームリンに対して行われたことを300の町に対して行うことを可能にするだろう。われわれが陸軍や海軍に現在費やしているものの半分があれば、毎年30以上の町にそのような寄付ができるのだ。

『トゥディ』紙（1904年8月10日）におけるイズリアル・ザングウィル (Israel Zangwill) 氏の記事

社会学会はアメリカでのように急成長している。教授達は切磋琢磨し、ゲデスはゴルトンのすぐ後ろについている。〈善き出生の科学〉である「優生学 (Eugenics)」の後に〈都市の科学〉である「都市学 Civics」がくる。前者のゴルトン氏はウェルズ (Wells) が広めた考えを発展させてきた。後者のゲデス教授はより新しい系列、より新しい用語を作り出してきた。〈政治統計学 (Politography)〉、〈政治遺伝学 (Polotogenics)〉、〈優生政治遺伝学 (Eu-Politogenics)〉、同じように、〈擬似ヘブライ化 (Hebrao-morphic)〉、〈擬似ラテン化 (Latino-morphic)〉、そして、〈真のユートピア (Eutopia)〉——ユートピア (Utopia) とは反対の考え——などが都市学の辞書に加えられた。それらは優れた言葉であり、両義にとれる例外とともに、より優れた構想でもある。しかし、私はそれらの一般的な概念はすべて、「人間の殻 (the human shell)」という覆いをまとった普通の人に伝えられると思う。この殻は都市である。それはわれわれを保護する外皮で、われわれ自身が周囲に建てたものである。われわれの家は狭義の殻であるが、広義にはそれぞれの家は複雑な全体の輪郭を示す一葉のものにすぎない。地理学はわれわれの殻を外側から作り、特別なコミュニティの精神は内側からそれを作る。歴史はそれが過去にどのように作られたのかを

教え、〈^{アート}技芸〉はそれが未来でどのように作られるべきかを教える。事実、輝ける生物学者であるゲデス教授はわれわれの都市の殻を心に描いている。そして彼はたまたま歴史に対する想像、倫理に対する敏感さ、美の知覚に対する感受性を持った。人間の殻はミツバチやビーバーのコミュニティのように単に幾何学的で建築術的なものではないため、われわれがそれらよりも高貴であることに違いを見出し、表現する。それはわれわれの感情や理想によって特徴づけられ、歴史のらせんに織り込まれている。低次の創造物は、近年まで特権的なある分類法に一元化されてきたが、これと同様に、人間性の表出すべては体系的に学ばれるであろう。大きな町の傍らにある川の近くにいる神の善意を賞賛した老婆は、科学的に〈都市学〉を考える際の間違いを誇張した方法で表現しただけだった。科学の基礎を見出すだろう地理学者達は、河川システムが研究の不可欠な要素であることを常に指摘してきた。進化の道筋は水源から海へと進む。しかし、ゲデス教授がわれわれに気づかせるとおり、その水源となる農村でさえ牧草地や森の奥地、狩猟に依存しており、ハンターは兵士や貴族などの芽生えとなる。河川全体が海に寄与するように、地域全体が最終的な都市に寄与する。教授は確かに、最も大きい都市についてでさえ基本的な観点や^{ナチュラリスト}自然研究者の観点を回復するのに努めるべきであると述べた。彼はロンドンを「中世の港の周囲にでき、共有地のつぎはぎが残るような、基本的には村落の集合」と見ている〔A 節〕。「パリのもっとも華やかなる部分、広い並木道の広がるエトワール広場〔星型広場〕と呼ばれるところでさえ、放射状に真っ直ぐ伸びた森林の中の馬車道にある、倒木のそばのハンターの落ち合い場所であった」ということを除けば、これは正しい見方である。私は多産される理知の素晴らしい工夫に気づかずにはいられない。胚芽からの成長としてのロンドンの景観と隔世遺伝的な本能の結果としてのパリの景観は科学的思考の手順が異なることに関係している。パリ再建においてあのオスマンが、単なる自覚しないハンターや森の住民であった

とか、ミツバチのように自動的に建設したということは空想的な仮説である。なぜなら計画どおりに建設したとしたら、都市は幾何学的な型の統合を避けることができず、多くの可能性がなくなるからである。……われわれは、優生政治遺伝学の分野において進化が無意識のうちに徐々に進んだことや、間違った未来に向かって建設したことよりも、優先して考えるべき問題に直面するだろう。疑う余地なく、われわれの創造のほとんどは模倣だろう。ゲデス教授は特に、少なくとも芸術的な自由意志の建物のためではなく、われわれが従おうと決めた基準に影響を与えるもつれた要素に気づかせるような示唆に富んでいる。共同の良心の発展とともに、われわれはこれまで失敗してきた多くのものよりずっと満足できる殻を作り出すことができるようにしなければならない。「田園都市」こそ〈都市学〉の特別な応用なのである。……

しかしながら、優生政治遺伝学は、われわれの人間の殻を単に構成することにとどまらず関わってくる。その持つ色や音楽はそれでもなお重要な項目である。しかしそれはあまりに重要なので一つの記事の一端では扱えない。しかし、ゲデス教授は刺激的な論文や、〈真のユートピア (Eutopia)〉の発見で賞賛される必要がある。なぜなら〈真のユートピア (Eutopia)〉(オートピア (Ou-topia) あるいはどこにもない場所という意味でのユートピア (Utopia) ではないもの) はあなた自身の場所を完全なものにするからである。そして、その完成に取り組む義務は、直接《あなた方》の上に横たわっている。その意味で「都市学——応用社会学の試み」は、あなた方に歩むべき道を示している。

(五條堀陽子訳)